

難を物の數ともせざる日蓮、固より偏土遠國の念佛持齋のともがらは眼中にあらず雪の上に聚れる千羽鳥何を騒ぐやと冷かに見渡した。

七

日蓮しばらく其騒ぎを白眼に見て、やがて静に聲をかけて云ふ、  
『各々静まれよ。今日は法門の爲に來りしなるべきに、斯く惡口雜言はよしなき事なるぞ。』

本間重連も然るべしと同じて惡口なす輩二三を掴み出す。之にて群雀のやうな騒ぎは静まる。さらばと真先に問ひかくる眞言師を唯一言で言ひ伏せて二口と云はせず、進で出づる淨土の法師を眞つ向に説破すれば、頭かき／＼引き退る。我も／＼と競ひ責むるを多くは云はず、窮所を突き、肺腑を抉れば、皆々返す辭もない。誓へば利劍を以て瓜を切り、逢然たる大風の枯葉を捲くやうなものであつた。元來が片田舎の法師原、佛法の理に達せざるは固より、自語矛

盾して我と顔を赤らめ、或は經を忘れて論と云ひ、釋を忘れて論と云ふ。矢繼早に責め立てたる敵軍の論鋒はたち／＼となつて全軍しどろもどろの體となつた。

日蓮云ふ、

『汝等知らずや、日蓮と云ひしものは去る文永八年の九月十二日子丑の刻に頸を刎ねられ畢ぬ。今佐渡に渡れるは其魂魄ぞや。佐渡の國に流されし已前の法門は佛の爾前の經なり。汝等無縁の如くにして、實は有縁なり。日蓮の魂魄が開迹顯本の教を聞いて迷へる夢を覺されよ。當世は念佛者禪律眞言師等大安語を放つて國中の人を誑かす。又天台眞言の高僧等名は其家に得たれども我宗に暗し。貪欲は深くして公家武家を恐れて此義を證伏し讃嘆するぞや。昔の多寶分身の諸佛は法華經の合法久住を證明したるに、今の天台宗の碩學は理深解微を證伏す。故に日本國には法華經の名のみあつて、得道の人一人もなし。日蓮此

時に出で、天にも棄てられ、諸難にも遭ふ。身命は固より期せず。今魂魄となりて佐渡に在り、法華經を以て此の日本國の諸人を助けんとするぞや。然るに迷ひの夢の覺めざるもの國中に満てり。されども記せよ、忘るるな。善につけ惡につけ法華經を棄つるは地獄の業なり。日本國の位を譲らん、法華經を棄て、觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、などの種々なる大難出來すとも、智者あつて我義を破らざらんには、決して彼等の言を用ひず。然らば其外の大難の如きは風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならんなど、誓ひし願は破るべからず。日蓮は妙法廣宜の爲に出でたるわ。衆生濟度の爲に出でたるわ。悔む改めて我が教を聞け。』

滔々として數千言、日蓮は法華の教理を説き、其の開迹顯本の説を説き聞かせた。逃げ足立たる大衆、あつと云ひさま、其軍門に降を請ふもの引きも切ら

す、即坐に袈裟平念珠を棄て、念佛申すまじと云ふものもある。念佛の僻事なるを云ふものもある。頑ななるはつぶやきながら歸る。恐をなして後をも振向かずに逃げ行くものもあつた。

さしもに集つたる塚原の法敵も散々になつて引退けば、本間六郎左衛門尉も『あな寒や、風邪でも引いたさうな、可惜法師原の法門争ひに引き出されて、法華風に惱まされては一期の不覺。』

とつぶやきながら立ち歸らんとするに、日蓮心に思ふやう、

『一つ不思議なる事を語つて彼を驚かしくれん。』

堂の縁にするりと出で、

『こや喃、本間殿、御身に物語りたいことが御坐るに、しばし待ち給はれ。』

と呼ばはつた。

呼び止められて、六郎左衛門尉立返る。日蓮問うて云ふ。  
「鎌倉へはいつ御登りなさるゝか。」  
「下人どもに農事をさせて、さて其後七月の頃には登らうと存する。」  
と答ふ。日蓮莞爾と打笑み、

「そは時の宜きを得たるものにあらず、弓矢取るものは公の御大事に逢つて所領をも給はるをば田島作ると申すなれ、只今合戦のあらんとするに急ぎ御登り高名して所領を給はりなされよ。お身は相模の國には名ある侍、田舎にて田作のために合戦に後れたらば何ぼう口惜かるべき。」  
と云ふ。六郎左衛門尉思ひ亂れて兎角の返事もなく、念佛者の居残れるものはげんな顔して怪む。

二月十八日急舟一艘、春の波を切つて此島につく。鎌倉にて合戦ありとの注進である。六郎左衛門尉取るものも取りあへず、塚原の三味堂に馳せ來り、

「御坊、去る正月十六日の御言は如何やと疑ひ申したるに、三十日の内に其事まこととなり申した。斯くあらば蒙古國も必定渡り申すべく、念佛無間地獄も疑ないと存する。某も之れより永く念佛は申すまじ。」  
と頼きながら申す。日蓮嗟嘆して、

「如何に我等が申すとも相模守殿たも用ひ給はずては、日本國の人用ふまじ。用ひずば國の滅亡は必定疑なし。日蓮不肖なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使なり。法華經の行者には梵天帝釋左右に侍り、日月前後を照し給ふぞや。斯る日蓮はよしや用ひるとも悪しう敬はば國は滅亡するぞ。况や數百人に惡ませ、二度までも流したり。此國の亡びんこと疑ひなかるべけれど、姑く其手を緩めて國を助け給へと、此日蓮が控ふればこそ今まで安穩にてあるなり。然るに又此度も用ひずば大蒙古國より打手を向けて日本國は亡ぼさるゝぞ。但し日本國の亡ぶるは平左衛門尉が好む禍にてあるぞ。斯くてはお身達も如何にして

安穩に此島に居るべきや。』

と云ふ。六郎左衛門尉、世にも淺ましげなる思色してそこを辭し、其夜一門引具して鎌倉へ駆け登る。

日蓮が過たざる豫言の神通は佐渡の一國を驚かした。

『あの御坊は神通力があるぞ。恐し〜。是から後は誓つて念佛者をも養ふまじ持齋をも供養すまじ。』

塚原の三味堂は小やかなる辻堂であつたが、埋れたる雪の中より赫灼たる法燈は輝き出して佐渡一圓を照らした。北海の離れ小島には春來つて妙法の華が到る處に開いた。念佛長者の唯阿彌陀佛、持齋長者の生喻房、事一大事と見て鎌倉に走せ登つて此事を訴へる。

『日蓮斯くて佐渡にあらんには堂塔一字も候まじく、僧一人も在らすなるべしと存ずる。阿彌陀佛をば或は火に入れ、水に流し、夜も晝も高山に登り、日月

に向つて大音聲あげ、上を呪咀し奉つる。其音聲は一國に響き渡つて凄じう候。』さらば日蓮に従ふものは國を逐ひ牢に入れよとの下知が下る。念佛持齋ののども得たりや應と法華の新信徒を迫害する。

佐渡の國にては紙足らぬ勝なるを阿佛房の情けに依りて得たる紙筆を執つて日蓮其心血を滌いで日毎夜毎に稿を起し書き列ねたる二大文字。一切衆生の暗きに迷へるを救はんとて之に題して開目鈔とは名づけた。

歸庵

日の光も月の光も通はぬ土牢に明暮誦經にのみ日を送り夜を送りたる日朗、師が佐渡に赴ける前に寄せたる書を涙と、もに巻き返しては讀み、繰返しては讀み、之を我師と思ひ、朝々暮々之を讀むに、牢番其切なる情に感じ入り、時折々其教化にあづかり、題目唱ふるものも少からずあつた。奉行宿屋左衛門光則も日朗が誠を傳へ聞て、之をいたはること一方ならず。歳も暮れなんとする一日、牢舎の番人、主より得たりとて桶の實六個七個をそと日朗に贈れるに、日朗之を手に受けて、

『我師の好ませしものなるに、我れ牢に在らずば如何に荒海の彼方なりとも、千里の遠き海山を隔つるとも、其佐渡に罷越し、師に奉つりて、御喜びの慈顔

を拜せんものを、あゝ儘ならぬ、是非もない。』

と涙をはらりと流して云ふ。番人之をあはれと聞て、潜に主なる光則に歎き聞え、そと土牢を出す。我は路用を贈らん、我は乾飯を奉つらん、杖よ草鞋よとて各々日朗に布施して、遙々の北海へと旅立たせる。

日朗飛ぶ鳥の籠より放たれたる如く、ひたすらに其功德を禮拜し、土牢にくみたる足のともすれば、進まぬがちなるを、心ばかりは急ぎ立て、山を越え川を渡り、風餐露宿、夜を日についでの兼行、越後の國より折からの寒風の激しきをも厭はず、佐渡の國につき、雪の中の三昧堂を訪れる。

『夢にてはあらざるか。夢ならば此儘覺めず居よかし。』

師弟互に取りすがつて喜びの涙せき敢へず、日朗はくさくさと心をこめたる品々を奉つり、又の逢ふ瀬を契りて、振り返り振り返り鎌倉に歸る。日蓮此離れ島に在ること四年と雖も、まことは月を數ふれば、三年を超えず、其間に日

朗茲に師を訪ひ奉つれること前後八たび此師あつて此弟子あり、此弟子あつて此師あり。其徳に化せられて、宿屋光則さへも妙法の信者となり、後には我邸を行時山光則寺と云ひ、日朗を仰て其開基とした。

佐渡にての法弟には最蓮房日淨が其の最もすぐれたるものであつた。もとは天台の學匠、罪あつて此島に流されたるが、たま〜日蓮の教義を聞き、無明の夢を醒まして其法弟となつた。

『御狀に云く、去二月の始より御弟子となり歸伏仕候。上は、自今以後は人數ならず候ども御弟子の一分と被思食候はゞ恐悦に可相存候云々、念佛眞言等の邪法邪師を捨て、日蓮が弟子となり給はん難有事なり。劫々より以來父母主君等の御勸氣を蒙り、遠國の島に流罪せらるゝの人、我等が如く悦び身に餘りたるものよもあらず、されば我等が居住して一乗を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都たるべし。されば我等が弟子檀那とならん人は一歩

を行かすして天竺の靈山を見ん。本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申すばかりなし、餘りに嬉しく候へば、契約一つ申し候はゞ貴邊の御勸氣とく許させ給ひて都へ御上り候はゞ日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも、諸天等に申して鎌倉に歸り、京都へ音信申すべく候。又日蓮先立つて許り候て鎌倉へ歸候はゞ貴邊をも天に申して古京へ歸し奉つるべく候。』

日蓮は最蓮房の歸伏を取り分け頼もしく思つた。最蓮房は時を見、折を得ては塚原の三昧堂に音づれる。日蓮は好き談合の相手を得て、之を嬉しと覺えた。一日、師弟かたみに打語らう所に、人聲近く聞えて。

『師はこなたにましますや。』  
と音づれるものがあつた。

二

春の月朧に霞む夜、三昧堂に師よと呼びたるは別人ならず、鎌倉より來れる

日興と熊王、日蓮見るより

『あら珍らしや。如何して來つる。』

と云ふ。二人は北海の風雪と戦ひて屈せず撓まず、元氣其顔に溢るゝ師を拜して唯嬉しさに涙ばかりが先立つ。かたみに別れし後のことを語り出で、夜ともにも物語は盡きぬ。鎌倉と京との異變は日興熊王兩人の口より詳に語られた。京の兩六波羅にては執權時宗の兄なる式部大輔時輔其南方に居り、北條長時（はうてうながとき）の次男治部大輔義宗其北方に居て、畿内西國のこと何くれとなく之を執行ふ。こゝに南方の時輔は最明寺殿の長子として弟時宗の下に居るを耻ぢて、潜に謀反を企てた。しかるに陰謀、事の成らざるに先だちて露顯し、鎌倉よりは之れを北方の義宗に告げて時輔誅滅の命を傳たへる。固より兩六波羅の探題、己がじゝ權力を争ふものから、時來たれりとばかり、文永九年二月十一日、義宗は軍兵引具して曉の露を踏で、南方の館を襲ひ、面もふらず切つて入る。南方に

ては事意はざるに出でたれば、散々に敗北し、式部大輔時輔今はかなはじとて落延びんとするを、寄手の兵目敏くも見て逃しもやらず、時輔遂に敢なくも討たれ、一族郎黨屍を洛中に曝す。公家にも中御門左中将實隆、片人したりとの聞えあつて押籠らる。京の春は此騒ぎにて慌しく過ぎ往く。

兵亂はこれに止らず、同じ月の十五日、鎌倉にては北條左近大夫公時同じく中務大輔教時、南方の時輔に加擔して、東西相應じての叛逆、事成らじと見て、目に餘る討手を引受けて花々しく戦ひ、算を亂して討死す。鎌倉の騒ぎは又一方ならずあつた。日蓮、最蓮房を顧みて云ふ。

『日蓮、文應元年を以て立正安國論を奉つれる時、自界叛逆難と云へり。北條一門に同士討あることは明に之を云ひたるに、今や眼のあたり其時は來ぬ。ついで來らんものは他國侵逼難、蒙古の賊はいよく我國を侵すべきか。ざるにても日蓮の言を用ひざる淺ましきよ。』

『いや鎌倉にて師の御教化にあづかりし人々は今東西一時に起れる叛逆を見て  
ひたすらに師の神通に驚嘆仕つりて候。』  
と日興熊王の二人口を捕へて云ふ。

かくて鎌倉より沙汰あつて、日蓮は塚原より雑太郡一之谷に移さる。文永十  
年四月七日、満山に若葉の匂ひ深く、椎の雫落ちこぼれたるところに苔の花咲  
く頃、此にしつくりひたる家に遷る。こゝを預れるは近藤次郎清久と云へるも  
の守護所の命を畏みて、此に日蓮を迎ふ。此地巖石峨々として聳え、巖に生ふ  
る松の風情も面白く、脚下に開く海水は晝圖を展ぶるが如く、遠近には眞帆片  
帆風を孕で往き、潮は溶々としてひねもすのたりのたりと去來す。鳥中第一の  
絶景にて、又塚原の雪の中とは似るべくもない。日蓮いたく其の風景の好きを  
愛し、山に攀ち登つて、展望を擅にする。取り分け山上の老松一本、萬里の長  
風に龍吟を發して常磐堅磐に榮ゆるを賞で、千年の縁り我が妙法の限りなき繁

榮に倣へよと、日毎に此に讀經する。後に此地に寺を建て、御松山實相寺と云  
ひ其松を袈裟掛松と唱へた。

四月二十五日、有明の油盡きなんとして曉の空に時鳥の一聲二聲啼く時まで  
筆を走らして如來滅後五百歲始觀心本尊抄を艸する。七月八日には十界總歸命  
の本尊にして十界實相の妙境なる大曼陀羅を書き顯す。文字は五字七字なれど  
も、三世諸佛の師、一切女人成佛の印文にて冥途にてはともしびとなり、死出  
の山にては良馬となり、天には日月の如く、地には須彌山の如く、生死海を弘  
誓の船、成佛得道の導師で、佛滅後二千二百二十餘年の間、一閻浮提の内には  
未だ弘まらぬものであつた。

三

絶海の孤島、地には黄金を出せども、日蓮未だ此地に渡らざるの前は佛天讚  
歎の本地ではなかつた。然るに天は日蓮を此の島に下して此に妙法の靈華は開



き、本地甚深の奥藏、一大事因縁の大白法たる妙法蓮華經の功德は水の卑きに就くが如くに流れて、六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬は到るところに現れた。一之谷の邑主近藤次郎清久の一門は皆歸依の心を起し、清久の子十郎信重は檀越となり、後入道として同郡中興に住みければ世に之を中興殿と稱する。其弟一位阿闍梨は眞言宗の僧であつたが、念佛ふつりとやめて、日蓮の法弟となり、學乘坊日靜と呼びなす。島の守護本間六郎左衛門尉重連は鎌倉より歸り來て、日蓮を尊敬すること厚く、日毎に布施の供養をする。阿佛房日得は一之谷のほとりに家を構へて朝な夕なに訪ひ來て師にかしづく。此地をば阿佛村と喚びなして、今に日得の法徳を傳へる。鎌倉よりは法弟檀越の人々衣服を送り、供物を捧げ、安否如何にと尋ぬる。斯くて一之谷の春秋は又塚原の雪霜とは異なるものがあつた。

此に北條家の一門に北條掃部輔時盛と云へるもの、蒙古の使趙良弼、筑紫の

太宰府に至り、我邦の事情を探り歸れると聞き、日蓮が他國侵逼難を思ひ出し彼日蓮こそ一代の名僧にて濟世の大智識である。彼を惡でさまさまの難儀に遣はするは北條氏一門の滅亡を招く所以と深くも思慮し、使を佐渡に送つて、さまざまの贈物あり、後年北條彌源太と稱し、入道して蓮盛と云ひ、日蓮とは淺からぬ師檀の約を結た。

文永十一年二月十四日、一通の赦免狀は突如として宿屋光則の許に下つた。

日蓮空しく佐渡に死すべきものに非ず、天は孤島の妙法廣宣を囑し、其功の成れるに及び、之を本土に呼び返さんとしたのでもあらうか。古より佐渡に流されしもの、一命を全うして歸り來たものはなかつたのである。申すも畏し、一天萬乘の順徳院ですら此にて御崩御遊ばされた。まいて流人と名のつくもの無告の鬼となつて幽魂永く此の孤島を離れ去らぬに、日蓮天下の惡しき受て、死ねかしと此に流されたるに、雪にも死なず、波にも死なず、飢ゑす寒へず、

阿佛房の刃の鋒先にも裂かれず、念佛持齋の責めにも屈せしめて、三年の配流  
恙なく、今赦免の沙汰に逢ふは、まことに佐渡あつて以來前代未聞のことと云  
はねばならぬ。佐渡の念佛行者が鎌倉への讒訴は日蓮を殺さずして、却つて日  
蓮を助けた。鎌倉幕府も日蓮の豫言に對しては流石に反省の餘地をなしたものと  
見える。然れども日蓮は閻浮第一の法華經の行者である。梵天帝釋日月四天  
龍神等は固より之を守護するのであつた。日蓮は死を恐れず、法の爲には自ら  
死地に投ずるを敢てした。しかも彼には安心立命の樂地があつた。其力其心  
は常に死地より彼は活路を開く。

『哀れなるかな、今日本國の萬人、日蓮並に弟子檀那等が三類の強敵に責めら  
れ大苦に値ふを見て悦で笑ふとも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮  
並に弟子檀那等が佛果にかなひて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等  
は阿鼻大城に沈み、大苦に値はん、其の時我等はいかばかり無慚と思はんすら  
つた。』

ん、汝等もいかばかりうらやましく思はんすらん。されば日蓮の弟子檀那等は  
いかに強敵重なるとも、ゆめ／＼退く心あるな、恐るゝ心を起すな。縦ひ首を  
は鋸にて引切り、胴をば鋸もて突き、足には鋸を打ち錐を以てもまるゝとも、  
息の通はんうちは南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死ぬなら  
ば、やがて靈山に赴きて寂光の寶刹に歸すべきぞ。あら嬉しや、あら嬉しや。』  
其南無妙法蓮華經と唱ふる聲は萬年の外未來の末まで流るゝところの力であ  
つた。

四

宿屋左衛門光則のはからひとして出牢後の日朗、赦免狀を捧げて佐渡に下る。  
日朗は歡天喜地の思、夜も多くいねず、晝も休ふひまも惜しと、幾百里の關山  
を物ともせず、文永十一年三月七日の夜、海を渡つて、小木濱に着船し、此に  
一夜を明し、翌る八日一之谷に向ふ。流石に心ばかりは急げども、遙々の海山

を凌ぎて來たることゝて身も心も疲れ果て、殊に今や師の在所にも程近くなるにつけ、氣も弛みて、夜に入りても未だ菴室にゆき着かず、木の下漏るゝ夕月を便りに、往けどもく路茫茫として、それと思ふところに出ない。失敗たり、こは途を迷ひたると覺しく、谷越え、森越えて、あなたにさ迷ひ、こなたにさ迷ふ。餘りの疲れに道の邊の石に腰打ちかけて茫然たりしが、やゝあつて氣を取直し、大音揚げて

『師の御坊はいづくにまします、日朗此まで参りたるに。』と叫ぶ。

此夕 恰も日興は師の命を受けて、病身の最蓮房をいたはりて、其庵室まで送りし歸るさ、木魂に響きて人の呼ぶ聲するに、松明振りかざして、聲をしるべに尋ね來れば、後山の坂路に叫べるは疑ひもなき日朗其人、  
『やよ日朗房にてはおはさすや。日興こそ参りたれ。』

と云ふ。日朗只嬉し涙にかきくれて、日興の手を戴き、

『聞き給へ、師は赦免の御沙汰にてあるぞ。』

『そはまことか。』

『其赦免狀こそ某が首に懸つたるは。』

『あら有難や。』

と日興は大地に平伏して禮拜する。

『いざ立たれよ。日興背負ひ申さうす。』

疲れ切つたる日朗を背に負ひ、又は手を執りてやう／＼にして一之谷にたどりつく。

『日興唯今歸りつきまいた。』

と門口より呼ばるれば、内に聲あつて、

『如何せし。餘りに間どつたるにあらずや。』

と云ふ。擬ふ方なき師の聲と、日朗嬉しく、

『師よ、日朗こそ参りたれ。』

と申す。日蓮世にも嬉しく庵室の扉を開いて之を迎ふれば、日朗にじり寄つて赦免状を進める。此夜は師弟懐舊の物語に、春の夜も明け易くあつた。

夜は明けて東の方は白み、日蓮は讀經を畢りて後、日興を伴ひ、新穂の守護所に罷り越して本間重連に赦免状を渡す。重連封押切つて之を讀めば、日蓮御勘氣の事赦免ある所なりとある。

『祝着に存する。』

とことほぐ。之より日蓮は諸方に暇を告げ、發足の用意おさく怠りない。いづれも其目出たさを祝ひ参りさせたが、又名残りの惜まるるはなべての人情、まして一たび日蓮此島に来て、諸人妙法の功德を受けたのであるから、綿々たる愁緒盡くるに由なく、惜しき別をする。中にも最蓮房、近き頃病に腦みて、我

遂に此島に朽ち果つるかと思ひ細き折柄であつたから日蓮と別れることは、とりわけ忍び難くあつた。』

『餘命幾もあらず、再會の望も御坐らぬ。唯之を今生の御別れと思召せ。』

と泣く／＼申す。日蓮も涙をこぼして、

『命は短けれども法は長し。我れはからずも此の島に流されたるが又法をば弘むるを得たり。望む所は、お身等いよ／＼信心を激まし、大法を護りて怠りあるな。此世の再會は、はからずとも未來は靈山にてめでたく面晤を致さうす。』と、言に激まして、心に泣いた。足かけ四年の佐渡在住に離れ小島も今別れると思へば流石に惜しく、なつかしく、船と陸とに見送り見返り、帆影の消え、島影の薄れ行くまで互に名残を惜んだ。

五

法敵日蓮赦免あつて恙なく此島を出發つと聞き、執念深き島の念佛持齋等よ

りよりに集りて評議して云ふ。

『彼の日蓮と申すは阿彌陀佛の御敵にて善導和尚法然上人を罵るほどの曲者なるに、たましく御勘氣を蒙つて此島に流されしこそ屈竟、彼奴を此島の土に埋めてくれんと存じたるに、何ぞや御赦免あつて歸ると申す、それを生して歸しては我等の不甲斐なき此上なきに、疾く用意して彼を攻め殺さずや。生身の彼を歸さず、屍骸として歸してくれやう。』

あちらに寄り集ひ、此方に馳せ廻つて、同士を募るうちに、順風吹き來つて春の海長閑に日蓮の船は佐渡を離れた。來たる時は波濤激しくあつたが、去るときは海は鏡の如く、滿帆に風を孕で、船はすべるが如く、しばらくの間に越後の海岸に着く、法華の日蓮愆なく歸國すと聞て、越後にては國府の念佛持齋真言の徒、信濃にては善光寺のものども、又集つて僉議し、  
『佐渡の島にて今まで生けて歸すものは乞丐ばかりであつたるに、彼奴日蓮如

かなれば、事なう歸るぞ。彼奴の如き法敵はやみ／＼生身の阿彌陀佛の御前を通すべからず、途中にて討取つて後の世の見せしめにせよや。』

と云ひ罵る。然るに越後の國府よりは日蓮護衛の武士あまた附き添ひたれば、國府も善光寺も手出すること能はず、

『あれ／＼日蓮が通るは通るは。』

と云ふうちに日蓮は過ぎ通つた。斯くて三月二十六日、鎌倉に歸る。法弟檀越は小町夷堂橋の北詰に新しき庵室を築きて、今日御歸りと聞て、五里七里十里途に迎ふるもの相つゞき、師の恙なさと法蓮の榮え昌ふる目出度さと喜び祝した。

『如何に方々、南無妙法蓮華經の功德をば能うぞ知り給ひつらん。日本乃至漢土月氏國一閻浮提に人毎に智あると智なきとを問はず、一同に他事を棄て、南無妙法蓮華經と唱ふべきなるに、此事未だ弘まらず、一閻浮提の内に佛滅後二

千二百二十餘年の間一人も唱へず、日蓮一人南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と聲を惜まず唱ふるにてあるぞや。風に随つて波に大小あり、薪に依て火に高下あり、池に従つて蓮に大小あり、雨の大小は龍の大小に依る。根深ければ枝繁く源遠ければ流長し、日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は未來永劫に流るべし。斯くて日本國の一切衆生の盲目は開け、無間地獄の道は塞がる。此の功德は傳教天台にも超え、龍樹、迦葉にもすぐる。極樂百年の修行は穢土の一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は未法の一時に劣るか、是れ偏へに日蓮の智の賢き故にあらず、時の然らしむるにてあるぞや。春は花さき、秋は果熟り夏は暖に、冬は冷し、是れ皆時の然らしむる所ではなきか。經に我れ滅度の後の五百歳の中に廣宣流布して閻浮提に於て斷絶して惡魔魔民諸の天龍夜叉鳩槃荼等をして其便を得せしむること勿れ云々とあり。此經文若し空しくなるならば、舍利弗は華光如來とはならず、迦葉尊者は光明如來とはならず、目健

は多摩羅跋梅檀香佛とはならず、阿難は山海慧自在通天佛とはならず、三千塵點も戲論五百塵天も妄語となつて、恐くは教主釋尊は無間地獄に墮ち、多寶佛は阿鼻の炎にむせび、十方の諸佛は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は一萬三十六の苦を受くるであらう。いかで其義あるべき。其義なくば、日本國は一同の南無妙法蓮華經なり。されば花は根にかへり、眞味は土にとどまる。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。』  
後年、身延より清澄に書き送つたる報恩鈔に傳へたる南無妙法蓮華經の光明は今此に鎌倉に赫灼として輝いたのであつた。

六

四月八日、夷堂橋の庵室に平左衛門尉からの使が来て、見參あれと云ふ。可笑しや頼綱は日本國の棟梁日本國の柱を倒さんとしたりしもの我に逢うて何事をか語らはんとするのであらうか。日蓮言ふがまに、其館に赴く、平左衛門

尉を上座にして左右に居並ぶ出頭人の誰彼近うくと日蓮の座をすゝめた。頼綱、日蓮を兎見角見て、さて慇懃に言を改め、

『いや御坊には久方振りでの對面、佐渡の風雪にも犯されず、見受くるところいかにも健やかなるは何より重疊。いかい艱難なることであつたと察し申す。今日は又わざ／＼の出頭、大儀で御坐る。ゆる／＼打くつろいで御物語あれよ。』

松葉ヶ谷の庵室に、人馬雪崩の如く押迫つて法華經で散々打たる時とは雲泥の相違であつた。日蓮靜に云ふ、

『伊東にても死せず、龍の口にても殺されず、又佐渡にても命を失はずして、不思議に永らへたる刑餘の日蓮、今又改めて見參に入ること悦ばしき限りにて候。日蓮決して虚言を述べて天下を驚すにあらざるは、我が先年來申せし詞の一々符合するにても知られつらん。申すも思や、今は鎌倉の世盛なる故に東寺』

天台園城七寺の眞言等と、及び自立を忘れたる法華經を誘れる人々關東に下り頭を傾け膝を屈めるやうに武士の心を取りて諸寺諸山の別當となり長吏となり王位を失ひし惡法を取り出して國土安穩と祈れば、將軍家並に所從の侍以下は國土安穩なるべき事ならんと打思ひて、之を用ふ。斯る大禍の僧ども用ひられては國定めて亡びなん。然るに稀に諫曉する人あるも之を顧みずして却つて仇をなす。其仇をなすこと彼の不輕菩薩の杖木の難に値ひしにも過れ、覺徳比丘の殺害されしにも超えたり。是に於て梵釋の二王、日月四天衆皇地神等やうやうに怒り、たび／＼諫めらるゝも愈よ仇をなす故に天の御計らひとして隣國に仰せつけられて之を戒め、大鬼神を國に入れて人の心をたぶらかし、自界反逆せしむ。されば御承知にてもあらん、佛滅後二千二百年の間未だ出でざる大長星空に現れ、未曾有の大地震ありたるなり。斯く三十三天の衆みな忿怒の心を生じ、變怪流星墜ち、二日俱に時を同うして出づるのみならず。他方の

怨賊來つて國人喪亂に遇はん。日蓮王地に生たれば身をば隨ひ奉つれども、心は隨ひ奉つらず、念佛の無間地獄、禪の天魔なることは疑ひあらず。殊に眞言宗を以て此國土の最も大なる禍ひなりと申すべし。大蒙古國を調伏せんことは眞言師に仰せつけらるべからず。若し斯る大事を眞言師調伏するならば、愈よ此國の亡ぶべきことは急なりと知ろし召さすや。」

聞く平左衛門尉を初めとして、並み居る諸士は一同に襟を正さずには居られなかつた。賴綱やをら膝を進め、

『して其蒙古はいつ渡り候とは思召す。』

日蓮云ふ。

『今年は必定疑ひあらず。日蓮、以前より勘へ申したることを更に御用ひなし。之を譬ふれば、病の起りを知らざる人の病を治さば病愈よ増すが如し。眞言師は固より、總じて當世の法師原を以て御祈りあらば、彌よ此國の軍は負け

申すべし。日蓮の云ふことまことか偽りか、既に御覽じつらん、猶迷の夢の醒めずあらば、一大事にて候ぞ。」  
日蓮の其辭は論すにてはあらで命するのであつた。唯是れ天より降したる命令の如く嚴かに聞えた。

七

「天に口なし、人之に代つて言ふ。日本國の國主諸僧比丘比丘尼等は、賴むところの彌陀念佛をば日蓮が無間地獄の業と云ふを聞き、眞言は亡國の法と云ふを聞き、持齋は天魔の所爲と云ふを聞き、念珠をくりながら齒を食違へ、戒を  
持ちながら惡心を抱く、極樂寺の生佛、良觀聖人、折紙を捧げて上に訴へ、  
建長寺の道隆聖人は輿に乗りて奉行人に跪く。諸の五百戒の尼御前等は帛をつ  
ひて、傳奏をなせども、之れ偏に法華經を讀みて、善くも讀まず、善くも聞か  
ざる故にて候。法華最第一の經文を見ながら大日經は法華經に勝れたり、禪宗



は最上の法なり。律宗こそ貴けれ、念佛こそ我等が分には叶ひたれと申すは、恰も酒に酔ひたるしれもの、如し。星を見て月にすぐれたりと云ひ、石を見て金にまさると云ひ、東を見て西と呼び、天を地と申すたぐひにして、月と金は星と石とは優れたり、東は東天は天と有のまゝに云ふものを仇とす。斯く物狂ひの多く、遂に日本國の人々は一人もなく日蓮が敵とはなり候。最勝王經に曰く、害の中の極めて重きは國位を失ふに過ぎたることなし云々と。此文の心は一切の悪の中にて國王となりて、政悪しく、我國を他國に破らるゝが第一の悪なりとの義なり。又金光明經に云ふ。悪人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に乃至佗方の怨賊來りて國人喪亂に遭ふ云々。此文の心は國王となりて悪人を愛し善人を科にあつれば、必ず其國は他國に破らるゝと云ふ文なり。法華經第五に云ふ。世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如からん云々。此文の心は法華經の敵は相貌を説けるに、二百五十戒を堅く持ち、迦葉、舍利弗の如

くなる人を國王之を尊みて法華經の行者を失はんとなりと説かれたるなり。時に當りて我がため國のための大事なる事を少しも勘へ違へざるが智者にて候ぞ。日蓮の諫曉を何とか聞き召す。之にても猶曉り給はぬか。日本國の亡びんとするを知らぬ顔して過し給はんとするか。一座のものどもは双の腋に冷汗を泉の如く流して之を聞いた。流石に猛き鎌倉武士も一人として之に刃向ふものはなかつた。右大將頼朝に従つて、鎌倉山に幕府を築きなせる東國武門の子々孫々、命は君の馬前に捧げて、君臣の義を泰山の重きと見たる鎌倉武士、腰に手挟む大刀小刀は伊達にはあらず、打てば金鐵の響きある双の腕、惜むは名、強敵と見て後へは引ず、十重二十重と取圍む敵陣へ唯一騎にて乗込で切りまくり、打破り思ふ敵と引組で死なうを男子の面目と心得たる鎌倉武士は、今まのあまり日蓮が權威を恐れず、威武に恐れず、威武に屈せざる面魂を見て流石に舌を巻い

て敬服するものも少からずあつた。  
此僧法の爲に千難萬苦を顧みず、人と戦ひ、劍と戦ひ、波濤と戦ひ、風雪と戦ひ、しかも精神愈よ加はりて國法、權者を物ともせず、向ふものをば切つて靡け、組まんとするものをば投げて棄て、勇は渾身に漲りて、氣魄は乾坤を吐吞す。古今の英雄僧、前代末聞の豪傑僧と心に讃歎して渴仰を寄するものさへにあつた。

「されば殿、日蓮は是にて退り申すべし。日蓮は日本の大難を拂ひ國を持つべき日本國の柱なり。某を失ふならば日本國の柱は倒るゝにて候ぞ。今此國に大惡魔入り満ちて國土亡びん時にこそ日蓮が立て申す法華經の法門は正義と見るべけれ、其時こそ思ひ知り給ふで御坐らう。」  
人々あつと思ふまに、日蓮は一禮して靜靜と此館を立ち出でた。

身延山

今年四月、連日の空晴れて雨一滴も降らず、又もや早魃の恐ありとて、阿彌陀堂の加賀法印定政に沙汰ありて雨の祈をなさしめらる。法印は弘法大師、慈覺大師。智證大師等が眞言の秘法を鏡にかけ、天台華嚴等の諸宗を胸に浮べたる高僧と聞えた。四月十日、法印、壇を築きて雨を祈るに、翌日沛然たる雨は篠を束ねたらんが如く、一日一夜降りひゞく、鎌倉殿御威あり、金三十兩、馬其他の引出物を賜はる。鎌倉中の上下萬人は手を拍ち口を極めて日蓮を笑つて云ふ、

「彼日蓮傍若無人に法華宗を唱へ、既に龍の口にて頸刎ねられんとして僅に許されれば、心を改めて惡口雜言をもつくまじきなるに、さはなくて念佛禪を

講るのみならず、真言亡國など、ほざいたれど、此度の雨の驗を見よ、真言の辱けなさは知らるゝにてはなきか。」

日蓮之を聞いて、

『しばし待て。彼の真言の弘法大師の惡法が、まこと國に驗あらば、隱岐の法皇(後鳥羽)は軍には負け給はぬ筈なり。弘法が華嚴經を法華經にまされりとかけるは十住心論にあり、壽量品の釋迦佛をば凡夫なりとするる文は秘藏寶鑰にあり、天台大師を盗人とかける文は二教論に見え、一乘法華經を説ける佛をば真言師の履物取にも及ばずとかけるは正覺房が舍利講の式に見ゆ。かゝる僻事を申す人の弟子なる阿彌陀の法印が日蓮に勝つならば龍王は法華經の敵にてあるぞや。必ずや梵釋四王に責められん。』

と云ふ。  
『そは又如何なる仔細の候。』

と法弟達尋ねれば、

『善無畏も不空も雨の祈りに雨は降りたれども大風吹きて荒れたりといふ。今に見よ、天變は疑ひあらず。』

と日蓮は教へ聞かす。言の末だ畢らざるに、雲次第に亂れてすさまじく飛び往き、木の葉さやぎ、風吹き出で、刻一刻よりはげしく、暴びに暴らびて、木を折り沙を巻き、屋根を飛ばし、堂宇民舎の倒るゝもの數を知らず、虚空には怪しき光物流星の如く飛び、大地には水縦横に流れ、人畜の死傷するものさへにあつた。しかも此風、全國を吹かす、關東八州を吹き、しかも其うち武藏相模に強く、兩國のうち取分け相模に暴れ、中にも鎌倉、鎌倉にて慘狀を極めたるは幕府の館、若宮、建長寺、極樂寺等であつた。人々は興さめ顔にて雨の祈りの功過ぎたるをつぶやく。日蓮の弟子は不思議々々と舌をふるふのみであつた。

平左衛門尉は鎌倉殿よりの沙汰として念佛無間眞言亡國などの他宗攻撃を罷め給へよ、御所の西門外に愛染堂を建て、良田一千町を寄附して天下安全の祈願所となさんと旨を傳へたが、日蓮は之を辭んだ。  
『仰せは辱けなく有難う候。但し日蓮は諸門諸宗と門を並べて一宗の無爲を願はず。』

平左衛門尉も返す辭なくて之を復命する。

五月二日、日本國中に法華宗を弘むること其妨げあるべからずとの宗門免許の牒狀が下つた。

『我言葉を用ひずして徒らに此狀あり。之れ我が宗門を信するにあらで、我が大法に諂ふのみ。』

と日蓮は長大息しながらに之を一瞥した。

三たび諫て聽かれざる時は即ち去る。顧みすれば文應元年七月十六日の立正

安國論、文永八年九月十二日の諫曉、今年文永十一年四月八日の殿中間答、數ふれば既に三たびとなつた。やみねく、今は日蓮遁れ隠れんと、其歳五月十二日、鎌倉を去りて甲州は身延の山中に分け入つた。

二

日蓮今年五十三歳、過去二十餘年の惡戰苦闘にさまざまの法難累りに至れども、日蓮の身は死せず、日蓮の心は磨せず、國家の爲に大群を恐れずして諫曉三たびに及びたるも、容れらるゝ所なきに至りて、應然として久しく妙法廣宣、逆化折伏の本地であつたる鎌倉を跡にし、甲斐國巨摩郡身延山へと身を隠した。

『上人、しばし留まらせ給へ。』

『我をも伴れてたべ。』

と法弟檀越の取絶れるを、心強くも後に殘し、從へる徒弟は日興、日向、日頂、日持、日進其他久本坊と熊王丸、師弟八人文永十一年五月十二日、人々に暇を

告げて、夷堂橋の庵室を出で立ち、送りくいていくまでも従ひ來れる人々を途々にて暇とらせ、其夜は酒匂に一宿し、それより駿州竹の下、車返し、富士の大宮を過ぎ、十六日は内房に一夜の宿をかる。山里の夜更けて、月は谷川にうつりて、瀬瀬の水に碎くるさま面白く、日蓮寝られぬまゝに、一首の歌を口占む。

全臥にふす夜のあまり寝られねば月を身延に起きかへるかな

境静にして日蓮の身も亦穩かであつた。嘗ては瓦礫の雨を凌ぎ、劍難、火難、水難、風雪難、波濤難さまざまの法難に安からぬ月日を過したりしが、たまたま通世の途すがら、静けき夜半の月に對しては雅懷を伸ぶることを禁じ得なかつた。後年日蓮又此里に月を見て

谷川にうつる今宵の月影をうつぶさに寝てながめけるかな  
又深草の元政身延詣での途すがら、此地に宿りて、

うつぶさに寝られぬものか片敷の枕の山は不二のしら雪と詠じた。之を合せて内房の三詠とは稱する。

こゝより甲州に入り、十七日相俣に至る。一條六郎信長は其子息太郎光家を案内として、さし送る。波木井六郎實長、其一門の歸依せるものを従へて路次に迎へ、歡ぶこと一方ならず。此日身延に入つて波木井殿の館に入る。六郎實長繪圖を引て此に一寺を建立せんとしたるを、日蓮堅くとどめ、六月十七日此に柱十二本、三間四面の草堂を作らせ、之を其庵室とはなした。之れよりして後九年、日蓮は白雲深き此庵室に留りて法華經を讀誦したのである。

『日蓮は日本六十六箇國島二つの内に五尺に足らざる身一つ置く處なく候ひしが、波木井殿の御育にて九箇年の間身延山にして、心安く法華經を讀誦し奉り候ひつる志をば、いつの世にかは思ひ忘れ候べき。知らずや、此人は無邊行菩薩の再誕にてや御坐すらむ。』

と後年日蓮は其感謝の意を六郎實長に申述べたのである。  
此身延山と云へるは、山高くして谷深く、富士川其傍を繞り、山には雲巻  
き雲舒び、川には水は瀬となり、淵となり、藍を流し、紺を溶かす。南には鷹  
取山あり、西には七面山、東は天子山、北に即ち身延、蓮山屏風の如く、板を  
四枚つぎ立てたるが如く、此外を廻りて四つの川あり、北より南に流るゝは即  
ち富士川、西より東へは早川と波木井河の二つが流れる。早川は急流箭を射る  
が如く、波木井河は大石を木の葉と泛ぶ。内に瀧あり、身延の瀧とも身延河と  
も云ふ。此四山四河の間に手の廣さほどの平かなる處あり、即ち日蓮其人の庵  
室のあるところであつた。木の皮を剥ぎて四壁となし、自死の鹿の皮を衣とし  
春は薇を折りて糧とし、秋は果を拾うて命を支ふ。雪降るときは一白天地を埋  
め、庵室は七尺、雪は一丈、四壁は氷となつて、軒の水柱は道場莊嚴の瓔珞の  
玉とも見えた。

「誠に身延山の栖は、ちはやふる神も恵を垂れ天下りましますらん、心なきし  
づの男しづの女までも心を留めぬべし。哀れを催す秋の暮には草の庵に露深く  
檐にすだく蜘蛛の絲玉を貫き、紅葉いつしか色深うしてたえだえに傳ふ懸樋の  
水に影を寫せば、名にし負ふ龍田川の水上も斯くやと疑はれぬ。又うしろには  
峨々たる深山聳えて梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲溢く、前には湯々  
たる流水湛へて實相真如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし。  
かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文  
誦持の聲のみす。傳へ聞く、釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。  
霧立ち嵐はげしき折々も山に入りて薪をこり、露深き草を分けて深谷に下て芹  
を摘み、山河の流も早き巖瀬に菜をすゞぎ、袂しほれて干わぶる思ひは、昔し  
人丸が詠じける和歌の浦に藻沙垂れつゝ世を渡る海士もかくやとぞ思ひやる。

つく／＼と浮身のありさまを案するに、佛の法を求め給ひしに異ならず。(中略)  
 されば無勝徳勝と云ひける者は土の餅を佛に供養し奉つりて、此功德に依て閻  
 浮提の主阿育大王と生れて、終に八萬四千の石塔を造り、國々に送り給ひ、後  
 に菩提の素懐を遂げ給ふ。されば法華經にて四十餘年が程きらはれし女人も佛  
 となり、五逆闍提と云はれし提婆も佛になりけり。然れば末代濁世の謗法闍提  
 五逆たる僧も俗も尼も女も此經にて佛にならんこと疑なし。然れば法華經第七  
 に云く於我滅度後應受持此經是人於佛道決定無有疑云々。此文  
 こそよによに憑もしく候へ。此等をさま／＼思ひつゞけて觀念の牀の上に夢を  
 結ばば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし、我身の内に三諦即一心三觀の月くもり  
 なく澄みけるを、無明深重の雲引覆つ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻  
 する事、此砌にしられつ、自らかくぞ思ひつゞける。  
 立ち立わたる身の浮雲も晴れぬべし絶えぬ御法の鷲の山風

日蓮自らが見たる身延の山は此やうなものであつた。後年庵室修葺の時に庵  
 室のありさまを述べて云ふ。  
 『去文永十一年六月十七日に此山の中に木を打切りて荷に庵室を作りて候ひし  
 が、やうやく四年が程柱朽ち牆壁落ち候へ共直す事なくて、夜火をとぼさねど  
 も月の光にて聖教を読み參らせ、我と御經を卷き參らせ候はねども風自ら吹返  
 し參らせ候ひしが、今年は十二の柱四方に頭を投げ、四方の壁は一所に倒れぬ。  
 有待保ち難ければ、月は住め雨はとどまれと觸み候ひつるほどに人夫なくして  
 學生どもをせめ、食なくして雪をもちて命を助けて候ところに、さきに上野殿  
 より芋三駄、これ一駄は珠にも過ぎ。』  
 朝には高きに登つて日天子を拜し、一卷の經を讀誦するを日々の課業となし  
 日中には法弟檀越の爲に妙法の玄理を説き聞かせ、夕は一座の僧俗とともに題  
 目の修行あり、心は澹として求むるところなく、意は安うして彼の天命を樂む。

されば檀越の布施を喜ばず、耕しては食ひ、山に入りて木の實を拾ひ、溪間の芹を摘み、秋の菑を貯ふ。波木井三郎は窃に日蓮師弟の爲に穀類野菜を調へて之を厨に入れて乏しからぬやうにと心を用ふる。又師が馬を好ませ給ふを知れば、庵室の側に厩を築きて太く逞まじげなる馬を繋ぐ、遠近の信徒我もくと衣食調度を寄せ来るものは引きも切らずあつた。

四

蒙古の攻め來らんこと今年を出でずと日蓮が叫ぶる其文永十一年の初冬には筑紫の浪風すさまじく狂ひ荒れた。

十月五日、對馬の國佐須浦にはさまさまの旗鼙と鼙へしたる蒙古の軍船夥しく碇を下した。蒙古の軍勢一萬五千、高麗の兵八千、水手船員六千七百八人、船の敷は九百餘艘と聞えた。浦人膽を消して之を地頭所に急告する。守護代右馬允宗助國、八十餘騎を召具し、汗馬に泡を吹かせて駆けつけ、來意如何

を詰る。兎角の返辭はせず、散々に船より射て、遮二無二陸に上る。助國、心得たりと陣を張り、一千人ばかりの賊を相手に甲斐甲斐しく合戦する。賊の將と思しきもの葦毛の馬に乗つて、一番に駆け向ふを、助國の嫡子馬次郎射て落す。つゞいて駆け來る賊を次男彌次郎へうと射る。あやまたず馬より落て死でける。親子三人、八十餘騎を鶴翼に備へて散々に戦ひけれども衆寡敵せず、守護代父子を初めとして、一門郎黨概ね此に討死する。

同じ十四日には蒙古の賊船、舵を轉じて壹岐に向ふ。守護代平内左衛門尉景隆百餘騎を引連れて矢合せする。景隆叶はずして城に據る。翌る十五日蒙古軍はえい聲出して城を攻め、城陥りて景隆此に自殺を遂げる。對馬壹岐の二島を攻め落したる蒙古軍は勝鬃揚げ、二島の人民を捕へて男は切つて棄て、或は擒となし、女を集めて手の平に穴を明け、繩を通して船に結びつける。慘らしいこと云ふばかりはない。さらば進めと肥前の沿岸に寇しければ、松浦黨の人々之



を防ぎたれども衆寡固より敵すべくもない、いづれも國難に殉し、或は殺され、或は俘となつた。

蒙古來の警報は電の如く六波羅に聞える。壹岐の變報は博多に達した。すは御國の一大事と、九州の大名小名、博多に駆けつけるもの道路に滿々つる。其人人には少貳、大友を始めとして、紀伊一類、大友、白杵、戸次、松浦黨、菊池、赤星、島津、原田、大矢野、竹崎、兒玉黨等以下神社佛寺の司などに至るまで我もくと駆せ往く。博多にて軍評議あつて少貳三郎左衛門尉景資を總大將となす。十月十九日、賊船筑前の今津に至り、一手は陸に押上り、水軍と並び進で、佐原、百道原、赤坂を打破つた。

目に餘る蒙古の大軍、其出でたちを見るに、鎧は軽く、馬は逞ましう、馬上の駆引巧に、射る矢は短けれど、鏃に毒を塗りたれば、中るものは毒氣に惱さる。打ち鳴らす大鼓の音、銅羅の響天地にとどろきて物すごければ、御方の

乗たる馬は之に驚きて、はね狂ふ。かて、加へて恐しきは鐵砲と云へる飛道具鐵丸に火を包で烈しく飛ばす。中りて割るゝ時は四方にばつと火炎迸り、すさまじく煙を吹きつける。響高ければ、初めて見聞せる御方の軍勢固より勇猛無比の武夫なれども、あつとばかりに肝を消し、目はくらみ、耳塞りて東西を知らず、之に中つて屍を戰場に曝らせるもの少からず。

固より名乗かけての一騎打にあらず、大勢一度に寄り合ての合戦なれば、勇める御方の軍勢駆け入つて、蒙古の大軍と切り結で、撃たるゝもの算を亂す。中にも松浦黨は何程のことやあるべきと、わつとおめいて大戦の中に割て入り、大勢此に命を殞す。原田の一類は深田の中に追ひ込められて、敵の塵しとなる。

菊池次郎武房、弟赤星三郎有隆、百騎ばかりを引連れ、山田次郎重基の百三十騎、託間別當太郎頼秀の百騎ばかりと、敵軍の中へおめき入り、さんぐくに

駈け散らし、家の子郎黨數多討たれて引退く、少貳景資を始として、白石、大矢重、竹崎等此を先途と戦ふ。此外名ある筑紫の勇士、恥を思ひ、我もくと攻めしかど、勝誇りたる蒙古の大軍物ともせず、ひた破りに破つて、廿日には博多近くへ亂れ入つた。

五

今津より今宿、姪ヶ濱、百道原を過ぎて博多までは一帯の濱路、前には海を控へて、志賀島の半島が外洋に突出する。残島浮島が、海岸近くに浮ぶ。博多は西に那珂川、東に石堂川が流れて、それより千代の松原、真砂は雪の如く、千年の松翠り深く、潮風に枝を吹かせて波の音と相應する。其松原の直中に鎮まりませるは箱崎の八幡宮、醍醐天皇の宸筆になれる敵國降伏の勅額長へに光を放つ。多々良の濱を過ぎて香椎宮が嚴かに鎮座ましますのである。

少貳三郎左衛門尉景資、敵軍にかけ合せて叶はじければ、水木城に引籠らん

とするを追駈け來りたるは蒙古の大將と思ほしきもの。其長七尺有餘、髯美はしく臍の邊までおひ下りたるが、赤き鎧をつけ、葦毛の馬に打跨がり、十四五騎打ち連れ、徒士のもの七八十名引具して追ひ來たる。其の時景資の旗の蟬口のはとりに白鳩翔け舞ひしかば、景資、さては八幡大菩薩の御影向と頼もしく思ひて従がへる弓取の名人に、あの大將を射て落せよと云ふ。心得申すと、弓取り、馬の首を立直して、よつ引いてひようと放つ矢は過たず、蒙古の大將の胸に發矢と中れば、主はたまらず馬上より眞倒さまに地上に落ちて地響きす。蒙古の軍勢恐をなし、傷つける大將を引かづきて引退く。景資の軍兵は力を得て、追ひ駈けて蒙古の騎馬武者一騎を擒にし、勝鬨揚げて水木城に引籠る。斯くて二十日の日も暮れて、沖の方には蒙古の軍船の篝火のみ赤う映えた。

此時、事急に出で、關東よりは加勢の軍兵來らず、軍勢の催促もなかりければ、御方の軍兵は總勢千騎に満たす。九州武士の武勇のほどを見よやと死物狂

ひに駈け合はせたが、多勢に無勢、氣は逸れども力は敵し難く、討死する御方の數も少からず、討漏らされたものは辛くも水木城に立籠つた。此日箱崎八幡宮も兵火に焼け失せて、御神體は極樂寺谷に御遷座ある。九州一圓は今や蒙古の馬の蹄に蹂躪られやうとしたのであつた。

此夜、沖中に凄じい物音して、浪高く風おどろ／＼と吹き出で、次第に吹き募り、雨さへに加はつた。黒雲空に鵬の翼をひろげて、一齊に降來る雨は百道の瀧を落せる如く、狂ひに狂ひし風は下界を微塵に碎けよと吹く。逆巻く波は岸を吞で、濱を洗ひ去らんとする。天地は是に至つて破滅するかと唯疑はれた。翌る二十一日、夜は明け離れて、日は金色の光を東の空に放つた。昨夜の風雨は名残りなく收まつて、濱邊の松にそよそよの風が吹くばかりであつた。沖の方とは見渡せば、こはそも如何に海を狹しとばかりに浮たる蒙古の軍船一艘も見えず。九州今は亡るであらう。日本國の滅亡も近づくやと夜來人々は安き

心もなくて泣き明したるに、さるにても蒙古の軍船はどこにか失せたるよと人々唯夢かとはかりに思ふ。

志賀島に一艘の蒙古船ありとの注進がある。御方の軍勢馳せ向へば、蒙古の軍兵手を合せ額を下につけて哀れを乞ふさまが見える。さうなくば御方も寄りつかず、遙か此方に集ひて、云ひ騒ぐのみであつた。すると敵將と思しきもの船の軸に突立ち上り、波間を見つめて、ざんぶとばかり身を投げる。つゞいて蒙古の軍勢船より下つて、海岸に上陸し、弓箭を棄て、兜を脱ぐ。御方の勢、我も／＼と駈け寄つて之を生捕にした。

一夜の風雨に蒙古の軍船はすべて波間に碎けて、溺死一萬三千五百餘人と註せられた。

蒙古の軍勢は不思議なる天の呵護に依つて一たび追退けられた。されども蒙古の變は固より之に止まるべくもない。他國侵逼難は重ねて迫りつゝあつたの

である。

雲のゆき

他國侵逼難の豫言は大地を打つが如く外れなかつた。日蓮は白雲朝な夕なに  
卷舒する身延の山中にて遙に此事を聞た。されども蒙古來は文永十一年にのみ  
で盡くるものではあるまい。さて今後は如何なるべき。

『人々よ、心を安するな。更らに大なる禍ありとは知らざるか。』

建治元年五月八日、佐渡の國なる一谷入道に書を贈つて云ふ、

『日蓮が申す事は愚なる者の申す事なれば用ひず。されども去文永十一年(太  
歲申戌)十月に蒙古國より筑紫によせてありしに、對馬の者かためてありしに、  
宗の馬尉尉逃げれば、百姓等は男をば或は殺し、或は生取にし、女をば或は取  
集て手を通して船に結付け、或は生取にす、一人も助かるものなし。壹岐によ

せても亦是の如し。船おしよせてありけるには奉行入道豊前の前司は逃て落ぬ。松浦黨は數百人打れ、或は生取にせられしかば、寄たりける浦々の百姓ども壹岐對馬の如し、又今度は如何あるらん。彼國の百千萬億の兵日本國を引廻らし寄せてあるならば、如何になるべきぞ。北の手は先づ佐渡の島に付て地頭守護をば須臾に打殺し、百姓等は北山へ逃げん程に或は殺され、或は生取られ、或は山にして死ぬべし。抑も是程の事は如何にして起るべきぞと推すべし。前に申しつるが如く此國の者は一人もなく三逆罪の者なり。是に梵天帝釋日月四天の彼蒙古國の大王の身に入らせ給ひて責め給ふなり。日蓮は愚なれども釋迦佛の御使法華經の行者なりと名乗り候を、用ひざらんだにも不思議なるべし。其失に依つて國破れなんとす。況や或は國々を追ひ、或は引ばり、或は打擲し、或は流罪し、或は弟子を殺し、或は所領を取る。魂の父母の使をかくせん人々善かるべしや。日蓮は日本國の人々の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし、

是を背かん事よ。念佛を申さん人々は無間地獄に墮ちん事決定なるべし、頼もし頼もし。』  
あゝら我が獅子吼の甲斐もなく、日本國は未曾有の禍に遭ふぞよと戒めたのである。文永の役畢つて久しからず、弘安の再舉は筑紫の海に十丈の高浪を揚げたのであつた。

日蓮云ふ、

『あはれなるかなや、嘆かしきかなや。日本國の人皆無間大城に墮ちん事よ。悦ばしきかなや、樂いかなや。不肖の身として今度心田に佛種を植ゑたる。今にも見よ。大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて日本國を攻めば、上一人より下萬民に至るまで一切の佛寺一切の神寺をばなげすて、各々聲をつるべて南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へ、掌を合せてたすけ給へ。日蓮の御房、日蓮の御房とさげび候はんするにや、提婆達多は釋尊の御身に血を出し、かども臨

終の時には南無と唱へたりき。佛とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを、業深くして但だ南無とのみ唱へて佛とは云はず、今日本國の高僧等も南無日蓮聖人と唱へんとすとも、南無計りにてやあらんすらん。不便々々。當世日本國の智人等は、衆星の如し。日蓮は滿月の如し。知らずや、一語集まりて大海となり、微塵積りて須彌山となる。日蓮が法華經を信じ始めしは、日本國には一語微塵の如し。法華經を二人三人百千萬億人唱へ傳ふるほどならば、妙覺の須彌山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。佛になる道は此より外に又求むることなかれ。』

日蓮は此見地からして、同じ建治元年、撰時鈔二卷を草した。

二

身延に在りたる時、ひとせ甲州へ旅立ちの次で、笛吹川のほとりなる石和と云ふ宿にかゝる。頃は夏なり、炎天に河原の小石も焼けつけんばかりであつたが、

黒雲山の端より立ち出づると見る間に一天俄かに搔曇り、雷さへに鳴り出で、雨すさまじく降る。立寄る木蔭に衣の袖しぼりて、しばし小息を待ち居たるに、山國の習とて日暮は早く、遠近に暮色漂ひてどこよりか、遠寺の鐘の音一點二點雨中に搖曳する。見渡すかぎり黄昏の光も微かなる中にちらりと閃めくは誰が賤の家の灯であらう。今宵はあれに一夜の宿を求めんと、河原に沿うて灯の光を便りに近づけば、水に臨んで一軒の住家がある。軒傾き、庇破れて蚊遣り火の煙が低く軒端にさ迷うて居る。日蓮近くと見るより、出で迎へたるは瘦せほうけたる一人の老人、頭には冬の夜の霜を戴き、身には海松と擬ふ破れ衣を纏ふ。日蓮近く立寄つて、

『やよ老翁、今宵一夜の宿をかしては給はらぬか。』

と云ふ。『いと容易い事には御坐りますれど、見らるゝ通りの此破家何のおもてなしも』

候はず、但し露凌ぎ、雨凌ぎとならば、星の下、草の上よりはやましにて候はん。蚊遣り火の煙は苦しけれども、先づ入らせられへ。』  
と申す。日蓮さらばと打通れば、従へる日興、日向も、あとべに附添うて、端近き處に座る。主の翁はまめくしく背戸に出で、ちとばかりの野菜を取り来て、心ばかりの夕餉を供へる。

夕立の雨もさらりと已みて、雲次第に散り、空には星明く、川上より吹き来る風は涼しくあつた。夜の更けるとともに蚊遣り火も絶々に、微かなる煙のたなびける中より老翁は黄ばみたる顔を出し。

『上人、我を何とか見すらん外ならず、鶺鴒を業とするものにて候。よしなき殺生の業を其日の活計とし、篝火の下に鶺鴒を放ちてさまゝの鱗族を逐ひ廻し、かつぎ上げ、擲ひ上げ、罪も報ひも忘れ果て、篝火は明くとも、我身の闇きに迷ふを知らず。さるに年老い氣も弱うなりて、ふと曉に目さめたる折、夜

半の鐘の音枕に響ける時過去の罪業を思ひ出でて後の世の報ひ恐ろしく、今は明けくれ其のみに身を苦められ、氣も魂も消えぬばかりにて候。願くば上人我を憐みて一乗の徳に依り、我を奈落の底より助け給へ、衆罪如霜露、恵日の光に照し給へ。』

とかきくどく、日蓮聞き訖つて、さらば得脱して得させんと静に經を讀誦する。

『あな堪へ難や、苦しや。』

とうめきく老翁も題目を唱ふる。

『御經の功德に依り、次第に横障の雲霧れて、真如の月を見る心地が致し候。嬉しや、悦ばしや。』

老翁の顔には喜の炎が閃く、若々しき血が漲るやうに見えた。

曉に近く、風さと戸の隙より吹けば、微かなる燈火がふと消ゆる。蚊遣り火の灰も冷かであつた。耳元に近き川水鑿々の音、夜の露にしつとりしめる衣の

袖、はたと讀誦の聲を止むれば、家もなく、老翁もなく、見渡す限りは一面の  
磧、東の空には黎明の雲がたなびく。

「師よ、此は如何に、狐狸の業が、變化の業か。」

日興日向は慌しく問ふ。

「いや、さにあらず之ぞまことの孤獨地獄、殺生を業とするものゝ落つる地獄  
とは知らずや。」

濟度して取らすべしと、磧に經の文を書いて之を川に投げ沈め、三日の勸行  
を營む。今に石和に残る鶺鴒山遠妙寺とは其舊跡である。

鶺鴒山遠妙寺の傳説は日蓮の奇蹟中にも知られたる一つである。

三

「やよ日興、日向も居らずや。今日は五月雨霽の空いと心地よく、山々の青葉  
若葉も見ゆる目に爽やかにあるぞや。如何に小室まで俱に往かずや。」

あつと答へて、二人の法弟、師のあとに従うて小室へと出で立た。

處は身延に近く、此には慧長法印善智と云へる修験者が住居なせるのである  
善智才學の聞き高く、其名は遠近に響いて人々の歸依も淺からぬ。日蓮試に  
彼を説き伏せばやと、斯く一日の漫歩を企てたのである。

法印の菴に程遠からぬ所に巖あり。日蓮之に腰打かけて朗々と誦し出す法華  
經一卷、青嵐さつと衣を吹いて、誦經の聲は菴のうちに聞えた。善智怪しから  
ぬこと、思ひ。縁を蹴てひらりと飛下り、草履穿く間も遅しと駈けつける。

「やよ。何者なれば、來て我觀念の妨げする。」

聲は若葉の楓を震はせた。其時巖上に聲あり、

「我は身延に住居する日蓮なるは、我が誦經は汝の迷を覺さんための鐘なる  
ぞ。」

猪口才なりと法印口を極めて論議に及ぶ。日蓮一々之を論破して、餘濫あら



しめず、善智言塞りて、

『及びもつかぬ。法弟として給はれ。』

と云ふ。日蓮之を諾なひて他日を期して歸庵した。

月日程過たる頃であつた。身延の庵室を訪れるものがあつた。

『師よ、坐せるか。』

『誰ぞ』と振り返つて見れば、庭の枝折戸に立てるは、別人ならず善智法印であつた。』

『久しう無沙汰を仕つりて御佗の致しやうも御坐らぬ。』

と云ふ。手に持ちたる提重と、もにぬつと庵室に入り、時候の挨拶、別後の事情何くれとなく、多辯に任せて云ひ出で、さて提重をすゝめて、

『之れなるは家妻の手作りに致せる餅、いや味も悪うは候へど聊か御庵室の徒然慰めん爲に持參致して御坐る。召し上らば、辱なき仕合。』

と云ふ。日蓮ちろり一瞥をくれて、

『それは芳志辱けない。』

何思ひけん、縁に出で

『白よ來よ〜。』

と呼べば、枝折戸のかたより走り出でたる一疋の白狗、主の顔打仰ぎて尾を振ること頻りである。日蓮、提重の餅一つ取るより早く投げ與ふれば、狗は飛びついて唯一呑と食ひしが、見る間に仰向けさまに轉倒し、四足を空さまにして悶絶し、血を吐いて忽ちのうちに落命する。善智面色さと變りて、轉ぶが如く庭にすべり下り、大地に額を打つけて、

『許させ給へ、師の御房。師はまことに何事をも豫じめ知らし召す大智識。某先きつ頭の法論争ひに打負たる遺恨やる方なく、法弟とならんと口には申せど腹には巧む邪惡の陰謀、餅に事づけて師をはからんとしたる淺はかさ。今ぞ誠

の心となり申たり。許させ給はずや、如何に如何に、  
とかきくどく。餘りの奇變に日興日向等は唯言なくてひたすらに師の佛神加護  
の力強さを感嘆する。

日蓮云ふ、

『逆即是順の理り、一念悔懺すれば、惡魔も佛になるぞや。我れ曾て越の國に  
て詠じたりし歌に

おのづから邪に降る雨はあらじ風こそ夜の窓は打つらめ。

とある。悔めるともに汝の罪は滅びしぞ。』

日蓮天空海淵の寛量、は此惡法印の罪を許し、名を日傳と賜ふ。死せる狗に  
は卒塔婆を立て、厚く供養する。日傳は其家を寄捨して寺とし、此を徳永山妙  
法寺と呼びなし、小室の村人も我先にと妙法に歸依する。後に法論の地に寺を  
建て、妙石山懸腰寺と稱する。

四

『あまのり(海苔)一袋送り給畢ぬ。又大尼御前よりあまのり長こまり入て候。  
此所をば身延の嶽と申す。駿河の國は南にあたりたり、彼浮島が原の海ぎはよ  
り此甲斐の國波木井の郷身延の嶺へは百餘里に及ぶ、餘の道千里よりも煩はし。  
(中略)峰に上つて見れば草木森々たり。谷に下て尋ねれば大石連々たり、大狼  
の聲山に充滿し、猿猴の鳴き谷に響き、鹿の妻を戀ふる音あはれしく、蟬の響  
かまびすし。春の花は夏につき、秋の果は冬になる。偶ま見るものは山賤が薪  
を捨ふ姿、時々とぶらふ人は昔なれし同法なり。彼の商山の四皓が世を脱れし  
心、竹林七賢が跡を隠せし山も斯くやありけむ。峰に上つて和布や生ひたると尋  
見候へば、さにはなくして蕨のみ並び立ちたり。谷に下て海苔や生ひたると尋  
ぬれば、あやまりてや見るらん芹のみ茂り伏したり。故郷のこと遙に思ひ忘れ  
て候ひつるに、今此のあまのりを見候てよしなき心思ひ出て憂く辛し。片海、

市河、小湊の磯のほとりにて昔見し海苔なり。色形味も變らず、など我父母かはらせ給ひけん、方違なる恨めしさ、涙抑へ難し。』  
房州東條なる新尼、即ち名越尾張守公時の妻なりし人より贈られたる海苔の香に故郷慕はしく、亡き父亡き母を思ひ出で、日蓮はしばし感慨に堪へずあつた。

諸方よりの法弟檀那は身延を遠しとせず、さまざまの物を贈る。或は満月の如き餅、油のやうなる酒、一石若くは三石ばかりの白米、細美帷、白小袖、薄墨染衣、芋、栗、焼米、薑、笋、串柿、青朧、干飯、柑子、茄子、柚、瓜、根芋、和布、餛、麥、梨、午券、大根、味噌、茗荷、甘酒、蒟蒻、枝豆、山葵、御器、蓋の類を初めとして、くさくさの品物、遠くは佐渡より房州、下總、鎌倉、近くは飯澤のほとりなる妙法の功德を仰ぐ人達の淺からぬ志を寄せたるものであつた。

『日月は地に落ち、須彌山は崩るゝとも、彼女人佛にならせ給はん事疑なし。あらたのもしや、頼もしや。』

干飯一斗、古酒一筒、角粽、あをざし笥、方々の物送り給ひて候。草にさける花木の皮を香として佛に奉つる人、靈鷲山へ參らざるはなし。況や民の骨を碎ける白米、人の血を絞れるが如くなる古酒を佛法華經に參らせ給へる女人の成佛得道疑ふべしや。

五月一日

日蓮 花押

妙法尼御返事

兵衛志が贈れる味噌一桶に答へては、  
『味噌桶一つ給ひ畢ぬ。腹の氣(下痢)は左衛門殿の御薬に治りて候。又此味噌を嘗めて愈よ心地なほり候ぬ。あはれあはれ今日御恙なきをこそ法華經に申上まゐらせ給へ。恐々。』

六月二十六日

兵衛志殿御返事

と云ひ、初春の上野殿よりの贈物を喜びては、

『春の初の御悦、木に花の咲が如く山に草の生出るが如しと我も人も悦び入つて候。さては御送り物の日記、八木一俵、白鹽一俵、十字三十枚、いも一俵、給ひ候畢んぬ。深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につきもり、谷は峰となり、峰より天に梯かけたり。鳥鹿は庵室に入り、樵牧は山にさし入す、衣は薄し食は絶たり。夜は寒苦鳥にことならず、晝は里へ出んと思ふ心ひまなし。既に讀經の聲も絶え、観念の心も薄し。今生退轉して未來三五を經ん事を歎き候ひつるところに、此御とぶらひに命活きて又もや見參に入り候はんすらんと嬉しく候。過去の佛は凡夫にておはしまし候し時、五濁亂漫の世にかゝる飢ゑたる法華經の行者を養ひて佛にはならせ給ふぞと見えて候へば、法華經ま

日蓮 花押

ことならば此功德によりて過去の慈父は成佛疑なし。故五郎殿も今は靈山淨土に參り合せ給ひて、故殿に御かうべを撫でられさせ給ふべしと、思ひやり候へば、涙かきあへられず。恐々謹言。

正月二十日

日蓮 花押

上野殿御返事

と申送つた。かくて身延の春は過ぎ、秋は暮れて、花開き花落ち、月満ち月は虧けて行く。

五

身延の庵室を音なふものはくさくさの贈物のみではない。故き檀越新しき法弟、妙法の香を慕ひ、蓮華の色を讃歎して時折には谷の静けさを破つた。波木井六郎左衛門は駿河江尻七村の邑主なる村岡民部に嫁して、今は夫と別れたる我養女を伴ひ來て受戒を乞ふ。日蓮、法名を妙圓日義と賜はる。建治元年の春

には日朗一人の兒を俱して登山する。日朗は鎌倉比企ヶ谷なる大學三郎能本が其家を轉じて寺となしたる長興山妙本寺の住職を授けて弟子檀方の教導をあづかる。日蓮兼て日昭を此處の住職に定めんと、夷堂橋の庵室に居を定めたりし時、日昭を招き此旨仰せありしに、日昭衣の袖をかき合せて、

『師命は重し、いかで背違致すべき、さりながら法運今は開けたるに似たれども諸宗の怨敵其間を窺ひ、權威を假り、宗論に依託けて、寄せ來るもの少からず、某不肖なれども濱土に在つて勇を養ひ、本宗に事あらん時は、躍り出でて其相手となり手を碎きて戦はん所存。さすれば如何に無法の敵なりとも、責は某一身にあつて我宗を傷つくことはあらず。よしや上に偏頗なるものありとて、如何致すことも叶ふまじ。』  
と申す。日蓮、其遠き慮を善とし、さてこそ妙本寺の住職は日朗に授けられたのであつた。

今日朗の身延に訪ひ來れるを、日蓮いたく喜び、土の香芳しき山當歸を肴に甘露のやうなる酒を取り出し、積る話に時の過ぐるを知らず。此時日朗伴ひ來れる兒を紹介せて、

『師よ是れなる兒は下總葛飾郡平賀忠晴の一子、其名を萬壽麿と呼びなし、今年七歳の幼兒には候が器量骨柄凡ならず、此月の初、其父携へ來て徒弟となして給はれとの請切なるに依り、諾なひて比企ヶ谷に留めしが、末頼もしく思へば師の見參に入れ、受戒を願はんとて此まで從ひ候。』  
と云ふ。日蓮兒の手を取つて、我側に居らせ。兎見角見るに、氣宇常人にすぐれて後年の大成も思ひやらる。

『よい兒ぢや。こは我弟子なるぞ。我法を弘めんこと疑ひもないぞや。』  
經を取つて靜に其頭に戴かせ。  
『今日より經一麿と呼べや。』

と云ひ、其儘身延にとどめる。天成の發明は、五行並に下る利發さ、倦ます怠らず麗しき玉を磨いて光愈よ明に、後年肥後阿闍梨日像聖人となつて、妙法の宣布を京都になしたるは此兒であつた。

卯月の曉の空に山杜鵑一聲二聲啼き渡る頃、珍らしや佐渡より尋ね來たりたるは一の谷なる中興入道信重、日蓮の健やかなるを祝して、さて一の谷なる法華堂の寺號をつけて賜はれと云ふ。日蓮取り敢へず、妙法華山妙照寺の寺號を賜はる。更に珍しきは同じ佐渡に流罪となり、日蓮赦免の時、特に名殘を惜みたる最蓮房日淨、赦免の沙汰あつて、鎖に繋がれし獸の放れたるが如く、自由の空に飛べよと籠の戸を開けたる飛鳥の如く、海を超え、山を超え、野森邑里を超えて、身延に詣で來り、庵室に程遠からぬ下山と云へるに一字の菴を結び此を我が住家とし、夜晝、菴室を音なひて、聽法に隨喜の涙を流す。下山の長榮山本國寺と云へるは彼が菴室の其遺蹟である。

經一麿の弟、龜王麿は五歳の幼年なるを、其父平賀左近衛將監忠晴、僕に負はせて身延に登り、此兒兄を慕うて日夜汝き暮らせば、法縁ありと思して徒弟となし給れよと請ふ。日蓮之を許して身延にとどめる。比企ヶ谷の第三世日輪聖人となれるは此幼き兒であつた。

六

建治二年三月十六日、師なる清澄の道善房遷化の由、房州より使を以て其沙汰ある。日蓮其書を取て額に推當て、之を悲む。

『老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。善生すら斯くの如し、いはうや人倫をや。されば古への賢者豫讓と云ひし者は劍を呑みて智伯が恩にあて弘演と申せし臣下は腹を割いて衛の懿公が肝を入れたり。如何にいはいはうや佛教を習はん者、父母師匠國恩を忘るべしや。此の大神を報せんには必ず佛法を習ひきはめ、智者とならで叶ふべきか。日蓮身命を惜まず或は所を逐はれ或は打

たれ、或は疵を蒙り、流され、切られんとし、佐渡の國まで往きて、今日切る明日切ると云ひしほどに四箇年を経て又鎌倉に入り、遂に鎌倉を出で、此山に入る。こはひとへに父母の恩、師匠の恩、三寶の恩、國恩を報せんが爲に身を破り命を捨つれども、破らざればさてこそ候へ。又賢人の習、三度國をいさむるに用ひずば山林にまじはれと云ふことは定れる例なり。此功德は定めて上三寶下梵天帝釋日月までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の聖靈も扶かり給ふらん。但し疑ひ念ふことあり、目蓮尊者は扶けんと思ひしかども、母の清提女は餓鬼道に墮ちぬ。大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墮ちぬ。これは力のまや救はんと思せども自業自得の邊は救ひ難し。故道善房はいたう弟子なれば日蓮をば悪しとは覺ばせざりけるらめども、極めて臆病なりし上、清澄を離れじと執せし人なり。地頭景信が恐しと云ひ、提婆瞿伽利に異らぬ圓地實城が上と下とに居ておどせしを、強ちに恐れて、いと惜しと思ふ年頃の弟

子等をだにも捨られし人なれば、後生は如何かと疑ふ。但一つの冥加には景信と圓地實城とが先に往きしこそ一つの助かりとは思へども、彼等は法華經の十羅刹の責を蒙りて早く失せぬ。後に少し信せられてありしは争ひの後の契りなり。晝の燈何かせん。されど淨顯房、義淨房各々二人は日蓮が幼少の師匠にておはします。勤操僧正、行表、僧正の傳教大師の御師たりしが却りて御弟子とならせ給ひしが如し。日蓮が景信に仇まれて清澄山を出でしに追ひて忍び出でられしは、天下第一の法華經の奉公なり。後生は疑ひ思すべからず。』  
此趣意を押擧げて報恩鈔と名づけ、七月二十六日身延より清澄の淨顯房、義淨房二人の許に遣す。其使は日向、日實兩人承り、道善房の墓前に此旨を啓して亡き靈を弔ひ、兩人各々一字一石の經を認め、一堆の經塚を築きて身延に立還つた。  
池上右衛門佐宗仲、武藏より來りて日蓮の安否を訪ふ。日蓮喜びて、しばらく

此山に逗留をすゝめたるに、宗仲其意に違はじと、此に起臥してまめくしく仕ふる。宗仲、日蓮の食べるものを見るに、粗糲の飯に粟稗などを混へ、一椀の羹には藜を浮べ、一盞の菜は鹽辛き如くもの、始と口にすべからず。宗仲家に還るに及び、妻子を招いて云ふ。

「食は色を増し、力をつけ、命を延べ、衣は寒さを防ぎ、暑さを支へ、耻を隠くすを趣旨とす。我れ此程身延に在りて上人の朝夕を拜し参らすに、滋味を食ひ、飽食暖衣、安逸に過すは之れ菩提に入るべき道に非ず。上人さへに斯くの如し。我等いかで口舌を樂ましめ、身を安ずべきものならんや。我は守りて違はず、汝等も此事忘るべからず。」  
宗仲は一生其志を渝へず、其行を易へずに通した。

若法師

一  
建治三年六月のことであつた。鎌倉の大佛門の西桑が谷に来て説法の壇を設けたる叡山の學僧龍象房、日夜分たす、諸人に説法して、さて云ふ、

「現在の佛法に不審のあらん方は來つて問答せられよ。」  
其聲は大きくあつた。鎌倉の上下貴賤は釋迦牟尼佛再來の如くに敬ひ、教壇の下に集ふ人は潮のやうであつた。此に日蓮の法弟三位房日進、今年十九歳になれるが、之を傳へ聞て、若き血潮の默然として控ふること得ならず、いで其邪説挫いでくれん、鎌倉中の有象無象の目を明してやらんと、衣の袖を打拂つて、桑が谷に赴いた。  
龍象房眼下に並み居る大衆を見下し、例の如く、不審の法門あらば尋ねられ



よと云ふ。満座は水を打ちたるが如く静まり返れる裡に、日進聲を高うし、  
『人間生を受けてより死を免るべきにあらざるは驚くべきにはあらねど、當時、  
日本國にて災の爲に死するもの其數を知らず、眼前の無事は人毎に思ひ知らざ  
るものは候はず。然るに上人京都より此鎌倉に來り給ひ、問ふべきあらば、各  
々憚らず問へとの仰辱けなし。さらば尋ね參らせん。末法に生を受けて邊土の  
賤しき身には候へども、中國の佛法幸に此國に渡り、之を信仰すべきなるに  
經の數は五千七千とありて數多なり。もと一佛の説なれば所詮は一經にてある  
べきに、華嚴眞言乃至八宗、禪、淨土とて十宗まで分れてあり。此等の宗門は門  
は異なりとも詮する所は一つかと推するに、眞言宗の祖なる弘法大師は法華經  
は戲論の法無明の邊域と誹られ、法華宗の天台大師を評盜醜等と罵らる。法  
相宗の元祖慈恩大師は、法華經は方便、深密經は眞實無情有情永く成佛せずと  
説かれ、華嚴宗の澄觀は、華嚴經は本教、法華經は末教、或は華嚴は頓々、法

華は漸頓と説かれ、三論宗の嘉祥大師は諸大乘教中般若經第一と説かれ、淨土  
宗の善道和尚は、念佛は十即十生、百即百生、法華經等は千中無一と説かれ、  
法然上人は、法華經を念佛に對して、捨閃閣拋或は行者は群賊と説かれ、禪宗  
は教外別傳、不立文字と説かれて候。然るに教主釋尊は法華經をば世尊の法は  
久しうして後必ず當に眞實を説き給ふべしと稱へられ、多寶佛は妙法華經は皆  
是れ眞實なり。十方分身の諸佛は吾相梵天とこそ云はれて候。されば弘法大師  
の説がまことならば、釋尊多寶十方の諸佛の云はれたるは皆是れ眞實に非ず。  
いづれをか信すべき。善道和尚、法然上人の説かれたると釋尊、多寶、十方分  
身の諸佛の仰せとは水火の如く雲泥の如くに異りて候。いづれをかまことなり  
とせん。殊に善導法然兩人の仰ぐ所の雙觀經の法藏比丘の四十八願中の、其  
第十八願に云ふ、たとひ我れ佛を得るとも唯五逆と誹謗正法とを除く云々とあ  
り。よしや彌陀の本願實にして往生すべくとも、正法を誹謗せん人々は彌陀佛

の往生には除かるべきなり。又法華經の二の卷には若し人信せざれば、其人命終りて阿鼻獄に入らんとあり。念佛宗の善導法然の兩人は此經まことならば阿鼻大城に墮るを免るべからず、此等の上人地獄に墮ち給はゞ、末學の弟子檀那等の自然惡道に墮入らん事疑ふべからずと存する。此等の不審詳に仰せ聞かされよ。』

辯も爽やかに、淀みなく述べ立つる。龍象房莞爾と笑ひ、

『先哲のことは疑ひ奉つるべからず、我等如き凡僧は唯仰いで信すべきぞや。』日進慌てず、更に二の矢をついて、

『こは奇怪なり。智者の詞とも覺えず。涅槃經に佛最後の御遺言として法に依りて人に依らざれとあり、人師に誤りあらば經に依れと佛は仰せられるにて候御房の私の語と佛の金言と比べんには、某如來の金言につき參らせん。斯くて疑はずとは云はるゝか。』

重ねかゝつてきびしく敵の壘に迫つた。

二

龍象房、壇下を一睨して、眉を蹙め、

『して、人師に誤多しとは、いづれの人師をか指して云はるゝぞや。』と云ふ。

『云ふにや及ぶ、弘法大師、法然上人の徒をば指して申すなり。』

と日進はいきまきて叫ぶ。龍象坊は小ざかしと云はんばかり、

『其義ならば問答は無益、満座の聽衆はいづれも其流を汲めば、某兎角申さば爵憤も出来るべし。濫りがはしきことは言はぬものぞ。』

と空嘯く。

『奇ッ怪至極の言條かな。人を恐れ世を憚りて經文の實義をも申し給はざるは烏乎の至り、智者と名ある上人の御言としては怪しからず候。惡法世に弘り、

人惡道に墮ちて國土滅びん時、法師の身として争で諫めぬことやある。されば法華經には我れ身命を愛まずと説き、涅槃經には寧ろ身命を喪ふこともあり。まことの聖人ならば、よも身命を惜み、世をも恐るゝことはあるまじ、古への智者聖人はさまざまの難苦に遭うて正法を弘めたるが故に其名あり。御房は此を思はざるや。』

と疊かけて申す。龍象坊しどろもどろになつて、

『さる人は末代にあり難し。我等は、世を憚り人を恐るゝものなり。さやうに仰せらるゝ人とても其言の通りには得行ふまじ。』

と云ふ。背には冷汗したゝりて、此席をば罷り出でんと思ふ。日進逃がさず、切り込む勢すさまじく、

『己を以て人を付り給ふな。某こそは今日日本國に其名の響ける日蓮上人の法弟にて候へ。師なる日蓮上人は末代の法師なれども當世の大名僧の如く用ひらる

るを求めず、人にも諂はず、世にも媚びず、唯此國に眞言、禪、淨土等の惡法並に謗法の諸僧滿ちて上下おしなべて歸依するを淺ましく思ひなし、斯くては教主釋尊の大怨敵となり、現世にては天神地祇に見離され、他國の攻に遭ひ、後生にては阿鼻大城に墮ちんものと經文に任せて説き給ひ、身命を些とも惜まず、去ぬる建長年間より今年建治三年に至るまで二十餘年の間つゆ怠らずされば法難の數へ難く、幕府の勘氣は二度に及びたり。斯く申す某も文永八年九月十二日の御勘氣の時は供奉の一行にてありしかば同罪に行はれて頸を刎ねられんとはしたり。斯くても身命を惜むものにて候か。如何に。』

日進の眼は輝きて、元氣は眉宇の間に溢る。龍象房の面色さと變りて、物をも言はず、唯眼ばかりばちちと瞬きする。日進とよめの鋒を敵の要所にぐざと刺し、

『御房の智慧にて他人の不審を霧らさんなどは大それた云分、此後、御無用

に存する。聞かずや苦岸比丘、勝意比丘等は我が正法を知りて人を助くべき由申されたれど、其身も弟子檀那も無間地獄に墮ちたり、御房の分際にて人を救はんとのたまふならば、師檀共に無間地獄に墮つるは必定。某斯くの如く手痛くは申すまじき筈なれども、惡法を以て人を地獄に落さんとする邪師を見ながら、責め顯さずば、皆惡道に墮ち給はんが氣の毒さに斯うも申すなり。智者と申すは國の危きを諫め人の邪見を止むるを云ふなり。如何なる僻事ありとも世の恐ろしく人の恐しければ諫めすと申す如き輩の與り知れる所に非ず。やみね〜。』

ひた呆れに呆れ、驚きの聲をも揚げ得ざる満座の大衆をあとにして、袖を拂つて起つ。どよめきの聲はそこ〜に起り、合掌讚嘆して、『やよ待ち給へ、今暫く御法門候へ。』と呼ばるる聲を凱歌と見て、日進は静々と退出した。

三

桑が谷の宗論争ひに、三位房日進は凱旋を揚げたが、四條金吾頼基の身の上には奇な禍がふりかゝつた。頼基の主なる江間北條入道は島田左衛門、山城民部の兩人を頼基の邸に遣して云ふ。

『金吾頼基、六月九日龍象聖人説法の道場へ、甲冑を帯して、亂入し狼籍に及び、あまつさへ散々に罵詈惡口致したる趣、其身の不覺、主家の耻辱なり。今日より法華經に心を寄すまじとの誓を奉つれ。其事叶はずば知行を沒收し、永の暇を取らせん。』

晴天の霹靂は少からず頼基を驚かせた。『いや途方もないことにて候。某も參聽致したれど、惡口狼籍などとは思ひもよらず。定めて讒者の所爲なるべし。頼基の法華經に歸依するは、身の得脱を思ふのみにあらず。頼基は父子二代命を君にまゐらす。亡父中務は故君の

御勅氣蒙らせ給ひける時、數百人の御内の臣等心變り候ひけるに、中務一人最  
後の御供奉仕つりて、伊豆の國まで参り候。頼基は去る文永十一年二月十二日  
の鎌倉合戦の砌り、折節伊豆の國に候ひしが、十日の申の刻に承りて唯一人  
箱根山をひた走りに馳せ越えて御前にて自害すべき八人の其隨一にて候ひき。  
自然に世靜まりければ今にては君も安穩にこそ渡らせ給へ。頼基今更何しに疎  
縁を仕つるべき、後生まで隨從し参らせ、頼基成佛し候はゞ、君をも救ひ参ら  
せ、君成佛しませば、頼基も助けられ参らせんとこそ存じ候へ。其れに就  
て諸僧の説法を聽聞仕つり、何れか成佛の法と伺ひたるに、日蓮御房の申さ  
るること最も尊く有難し。眞言、禪、念佛の三つの惡法關東に落ち下りて存外  
に歸依するもの夥し。故に梵天帝釋日月四天怒をなし給ひ、先代未曾有の天變  
地妖を以て諫むれども、用ひ給はざれば、隣國に仰せつけて法華經誹謗の人を  
罰し給ふ。日蓮上人一人此事を知しめせり。此くの如き尊き嚴しき法華經にて

おはし候間、主君をも導きまわらせんと存じ、さてこそ此御經に歸依して候  
然るに唯今讒言に依り、起請に及ぶべき御沙汰あり。頼基若し起請を書き候は  
ゞ、君も忽に法華經の御罰を蒙らせ給ふべし。頼基斷じて誓ひを仕つらず。』  
頼基はきつぱりとして之に答へた。さらばとは是非なく知行を沒收られ、親子  
三人流離の身とはなつた、日蓮遙に之を聞て自ら頼基陳狀の一篇を認めて、頼  
基に代り其主君江馬入道に進めさせた。又頼基の健氣なる志を賞で、一書を  
遣はす。

『去月(六月)二十五日の御文同月の二十七日の酉の時に來りて候。仰せ下さる  
狀と又起請かくまじきよしの御誓狀とを見候へば、優曇華の咲きたるを見る  
か、赤梅檀の嫩葉になるを得たるか、珍らし香ばし。(中略)唯事の心を案する  
に、日蓮が道を助けんと、上行菩薩貴邊の御身に入りかはらせ給へるか、又  
教主釋尊の御計らひか、彼の御内の人々うちらびこつて、良觀龍象が計ひにて

や定あるらん。起請をかゝせ給ひなば愈よ彼奴ばら驕りてかた／＼に觸れ申さば鎌倉の内に日蓮が弟子等一人もなくせめ失ひなん。(又略)唯一口に申し給へ我とは御内を出て所領をあぐべからず、上より召れ出さんば法華經の御布施、幸と思ふべしと罵らせ給へ。返す／＼奉行人にへつらふ氣色なかれ。(下略)然るに弘安元年、江馬入道は先非を悔み、頼基を召返して、こたびは舊にいやましたる肥饒の土地、井筒田、殿岡、内船の三がの莊を賜はり、前の如く忠勤を勵めと沙汰ある。頼基、歡天喜地の情に堪へず、之れ皆上人の賜物と早速に之を身延に報ずる。日蓮喜で云ふ、  
『此れほどの不思議はなし。之れ偏に陰徳あれば陽報あるなり。我が主に法華經を信じさせんと思ひし心の深き故なり、根深ければ枝榮え、源遠ければ流長し。一切の經は根淺く流近く、法華經は根深く流遠し。』

四

後宇多天皇の建治四年に改元ありて弘安と云ふ。其歳の七月二十七日、遙々の波濤關山を越えて、佐渡より阿佛房、身延の山に來る。文永十一年の初めに身延を音づれてより是歳まで僅か五年の間に三度詣で來ることなれば日蓮喜び且驚き  
『御房は齡九十にはあらずや。さてもさても老年の身を以て遠路屢ばの御尋ね芳志いつ迄も忘れ難し。大地よりも厚く、大海よりも深き御志と申すべし。釋迦如來は薩埵王子たりし時、飢ゑたる虎に身を飼ひし功德、尸毗王とありし時、鳩の爲に身をかへし功德をば、末代に斯くの如くの法華經信せん人に譲らんと、多寶十方の佛の御前にて申させ給ひしにてあるか。有難や有難や。』と云ふ。阿佛房は包を解いて清らかなる單衣取り出して、妻なる千日尼よりの布施物なりとて進める。又取り出したる袈裟と法衣とを前に並べ、  
『老の身の日影薄う、餘命幾程もあらぬほどに願くは出家の數に加へ、この法

衣と袈裟とを着て、死出の旅路への晴衣と致したう候。』  
と云ふ。日蓮よし／＼と首肯づきて剃髮の儀を調へた。阿佛房の喜びは云ふばかりもあらぬ。又千日尼よりの書面に、

『女人の罪障はいかゞと存候へども、御法門に法華經は女人の成佛をさきとするぞと候ひしを、萬事は頼み參らせ候て云々。』  
とあれば、日蓮之に返し文してつかはす。

『内典の佛法に入りて、五千七千餘卷の小乗大教は女人成佛かたければ、慈母の恩報じ難し。小乗は女人成佛一向に許されず、大乘經は或は成佛或は往生をゆりたるやうなれども佛の假言にて實事なし。但法華經計こそ女人成佛慈母の恩を報する實の報恩經にて候へと見候ひしかば、慈母の恩を報せん爲に此經の題目を一切の女人に唱へさせんと願す。』

阿佛房は暫く身延に滞在し、やがて徒弟一人を附き添へて佐渡に送り歸した

が、翌る弘安二年三月二十一日、彼島にて身まかる。子息遠藤九郎守綱、其遺骨を頸にかけて身延に詣で、其遺言に従つて、此に一基の塔を建てる。日蓮厚く讀經供養あり。守綱も剃髮して名を阿佛房日滿と賜ひ、やがて佐渡に歸て其家を寺とし、蓮華王山妙宣寺と名づけ、父日得をその開山とし、自らは第二世の住職となつた。其後弘安三年の七月朔日、日滿又身延に登る。母なる千日尼は烏目一貫五百文、海苔、和布、干飯などを參らせて、こまごまとの消息あり、日蓮之に返して云ふ。

故阿佛房の聖靈は今いづくにかおはすらんと人は疑ふとも、法華經の明鏡を以て其形を浮べて候へば、靈鷲山の山の中に多寶佛の寶塔の内に東むきにおはすと日蓮は見參らせ候。故阿佛房一人を寂光の淨土に入れ給はずば諸佛は大苦に墮ち給ふべし。たゞをいて物を見よ。たゞをいて物を見よ。佛のまこと虚ごとは、これにて見奉つるべし。さては男は柱の如し。女は桁の如し、男は足の

如し。女は柝の如し。男は足の如し。女は身の如し。男は羽の如し。女は身の如し。羽と身と別々になりなば何を以てか飛ぶべき。柱倒れなば、半地に墮ちなん。家に男なければ人の魂なきが如し。公事を誰にか云ひ合せん。善き物をば誰にか養ふべき。一日二日違ひしをだにも覺束なく思ひしに、去年の三月の廿一日に別れにしが、去年も待暮せど見ゆる事なし。今年も既に七月になりぬ縦ひ我こそ來らずとも如何に音づればはなかるらん。散りし花も亦た咲きぬ落ちし果も亦たなりぬ。春の風も變らず、秋の景色も去年の如し。如何に此の一事のみ變り往きて本の如くなかるらん。月は入りて又出でぬ、雲は消えて又來る。この人々の出で、返らぬ事こそ天も恨めしく地も歎かしく候へ。さこそおぼすらめ。急ぎ／＼法華經の糧料と頼み參らせ給ひて靈山淨土へ參らせ給ひて、見參らせさせ給ふべし。』

其言はまことに懇惻を極めて、紙外に聲のするやうに覺ゆる。

筑紫の波風

文永十一年の敗軍を物ともせず、元の帝忽必烈は杜世忠、何文著、撒魯都丁の三人を使とし、高麗人を案内として、建治元年四月十五日長門の室津に到着した。太宰府よりは此使を鎌倉に護送する。九月七日、幕府にては總勢五人の元、高麗の人々を龍口に引出して首を刎ねる。遙遙海を凌いで主命重しと、使の旨を致せば、身は秋風寒き夕、異域の土となる。流石に選ばれし國使のことゝて怯びれもせず、何文著は最後の頌を作る。

『四大元無主、五蘊悉皆空、兩國生靈苦、今日斬秋風』

斬られし時三十八。杜世忠が出門の詩に云ふ、

『出門妻子贈寒衣、問我西行幾日歸、來時儻佩黃金印、莫見蘇秦不下機』



行年三十四歳を一期として君國の犠牲とはなつた。鎌倉幕府は鎮西に沙汰して沿海の守備を厳しくする。京都の大番の兵を停め、防禦をさくゝ怠らぬ。日蓮遙に此事を傳へ聞て云ふ、

「蒙古の人の頸を刎られ候事承りたり。日本國の敵なる念佛眞言禪律等の法師は切られず、科なき蒙古の使の頸を刎られたるは不便なり。仔細を知らざる人は某の勘へあてたるを驕りて云ふとや聞かんれども、さにはあらず一切の大事の中にて國の亡ぶるが第一の大事なるぞや。最勝王經に云ふ害の中の極めて重きものは國王を失ふに過ぎたることなしと。文の心は一切の惡の中に國王となりて政惡しくして、我國を他國に破らるゝが第一の惡なりと説れたるなり。又金光明經には惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊來りて國人喪亂に遭ふ云々とあり。文の心は國王となりて惡人を愛し善人を科にあつれば、必ず其國他國に破らるゝと云義なり。日本は皆人の歎け

る中に日蓮が一類は歎きの中に悦ぶぞや。國は蒙古の攻を、よも免れまじけれど、某等が國の爲に責められたるは天も知しめせば、後生は必ず助からんとて悦ぶなり。」

是歲十一月には上總介北條實政、鎮西に下向して蒙古來の防禦をする。鎌倉幕府は更に海岸防禦のみを足れりとせで、十二月八日には太宰府に其沙汰あつて高麗征伐の準備を始めた。博多の沿岸には大石を疊みて屏風の如く、二丈三丈の石築地を構へる。斯くて建治二年同じく三年弘安元年は、彼は出征の準備に、此は防禦の守備に暮れた。

弘安二年六月、元の將軍范文虎は其部下の周福、樂忠、通事陳光を使として對馬に抵らしむる。書面の文辭無禮を極めたれば、之を筑前の博多に斬つて棄てる。膽斐の如き北條時宗を戴ける鎌倉幕府は手ぐすね引いて蒙古來れとはかり待ち設ける。

杜世忠等斬られたりとの報は元の朝廷に達して、猪口才なり、日本、無禮なり東夷、攻め落して亡ぼしくれんと、忽必烈烈火の如く、逆鱗あつて、征日本行省と云へる官廳を設け、盛に戦艦の準備をする。日本征伐の兵士を募集する。水韃靼の兵士に従軍を命ずる。弘安三年十一月には高麗王より軍備整ひ仕たりとの旨を元廷に啓する。元帝之を聞き召して痛く賞美あり。諸道に諭して、日本征伐の兵は道を高麗に取るも其民を擾すこと勿れと沙汰があつた。

高麗の中替金方慶を以て高麗軍の元師を命ずる。朴球、金周鼎は其左右副都統となる。元軍の都督は右丞相阿剌罕、右丞范文虎本軍を率ゐ。元帥斤都右丞洪茶丘は其前軍に將となつて、此役には前敗の耻を雪ぎ、見事東海の孤島を蹂躪つて、降参させ、蒙古の威武を示さんものと、將士勇み立て出陣した。

二

蒙古再度攻め来るよし其沙汰あり、社の數々、山々寺々の祈禱は其數を知ら

す。伊勢の大神宮には勅使が立つ。龜山上皇には石清水八幡宮に御幸あり、西大寺の長老を召されて、大般若を供養せらる。大神宮への御願には、朕が御代に斯る國難出で来て、まことに此日本傷はるべくば御命を召さるべき由御手づから書給ふと申す。人々の心は更に安からぬ。

弘安四年五月二十一日、玄海の海上に夥しく異國の兵船見はる。是れ忻都、洪茶丘、金方慶の率ゆるところの元の前軍及び高麗軍で、總勢四萬人、兵船九百艘とは聞えた。高麗軍先づ壹岐對馬に上陸し、見かくるもの出合ふものを打殺す。島の人々、妻子を引具して深山に逃げかくるを、あとより追かけ、赤子の泣く聲を便りに刺殺し、射殺す。元の前軍は兵船濤を切つて、殘島、志賀島に到着す。高麗の船も宗像沖より押寄せて元軍と一つになる。

壹岐の急報は博多に聲える。折ふし夜中のことなり、人々唯だ慌て騒ぎ、汗馬東西に馳せ違ふ。時は六月五日のことであつた。博多に集へる大名小名は石

築地の上に驅け登り、敵船を見下して矢種を惜まず射かける。大矢野十郎種保  
同三郎種村は二艘の舟を闇の海に泛べ、楫の音静に波の上を走せて敵船に乘移  
り、驚く賊兵を斬ること二十一人、火を吹きつけて、さつと引上げる。火炎は  
すさまじく起つて、あたりの船を焼き拂ふこと四五艘、炎のうちに阿鼻叫喚の  
聲は手に取る如く聞えた。

賊船之に懲りて、船を鎖にて繋ぎ合せ、警衛おさく、怠りなく、近寄る日本  
の兵船ありと見ば、石弓を亂發して、ちつとも近づけず。此に伊豫の住人河野  
六郎通有は石築地をうしろに海に向つて陣を張り、敵を引寄せて勝負を一戦に  
決せんとする。海上遙に見渡ば、敵船ひししと海路狭しと押並び、旗翻と  
して潮風に靡くは千草の花のやうであつた。通有先陣せばやと心を千々に砕い  
たが、あの多数の船の中に飛び入つても徒に命を波間に落すばかり、さて如何  
にすべきとて心中に日本國の大小神祇別けては、本國三島大明神を祈念する。

不思議や沖の方より白鷺ひらりと舞ひ下り、橋の上に置きたる征矢一つ咩  
へて、敵船の上を翔り、中にもすぐれて大きな兵船の、樓閣巍々と聳え、金  
銀の光眩ゆくりばみたる船の上に落して、虚空遙かに舞ひ上つて、唯一つの  
白い星となつて消え失せた。通有目じろぎもせず、之を望で、

『あら有難や、是れ明神が敵の大將の船を教へ給ふのであるは。』  
云ひも終らず、伯父なる伯耆守通時と唯二艘にて乗り出し、敵船の中へわつ  
て入る。御方は之を見て、河野は物にや狂ふと驚きの眼を以て見送る。敵船に  
ては奇異なことかな、降参するにやあらんとて、射かけもせずに見守る。通有  
は彼大將の乗れりと覺しき船の下まで漕ぎ寄せ、鍵を掛けてひらりと乗移  
る。敵船にては、こは何事と責め問へども、言通せねば答へもせず、乗り移る  
と見る間に躍りかゝつて切りまくる。通時は長刀、通有は大太刀、従ふ百人ば  
かりの兵各々得物を閃めかして競ひかゝる。遠き船にては之を知らず、近きは

騒ぎ立て、己が船々を守備する。通有通時兩人揃つての大力大剛なれば、瞬た  
く間に、敵を切靡き、玉冠つけたる大将と覺しきものを虜にして我船に打乗せ  
敵船に火をかけて引退く、通時通有、いづれも總身に傷を負うて、血を浴びた  
が、取り分け通時は重手であつた。日は暮れて海の上は薄暗くなつた。河野の  
船は之に紛れて、さつと引退いたれど、追かくる敵船は一艘もなかつた。

三

目に餘る敵船を物ともせず、夜討に出かくる勇士の面々は其數少からず、但  
し御方の軍勢の命を落すものも亦其數夥しくあつた。河野通時さへに此程の  
拔駆けの合戦に手傷負うて歸るさの船中にて失せた。少貳覺惠も討死する。大  
友、島津、秋月、菊池、竹崎の面々、此を先途と奮戦する。

蒙古の本軍にては都統阿剌罕途にて病となり、左丞相阿塔之に代つて諸軍を  
總督する。范文虎は十餘萬の軍兵と三千五百艘の船を引連れ、ひし〜と逼つ

て來た。斯くては九州國の攻め落さるゝことも遠かるまじく、長門に押寄せ、ひ  
た押しに都へ上るであらうとの取沙汰が驚しい。人の心は鼎の沸き立つやうで  
あつた。九州中國四國の軍兵、鎌倉の指揮に従つて大宰府に集るものは雲霞の  
如く、大名小名の海岸に防戦するもの三十二人とは註せられた。敵船は壹岐、  
對馬、松浦、平戸より筑前の北海にかけて海上一面に泛ぶ。御方は宗像、香椎、  
立花、多々良濱、青柳、箱崎、博多、名島、鳥飼、赤坂、生松原、百道原、今  
津、今張、姪濱、松浦、平戸の海岸に充滿つる。關東へは櫛の齒を引くが如く  
日々の戦況を報告する。鎌倉にては宇都宮三河守貞綱に命じて六萬餘騎を率ゐ  
て鎮西加勢として差遣はす。貞綱は夜を日についで西に向ひ、備中の國まで到  
着した。

蒙古の軍勢にては海岸に築ける石築地を見て、更に二丈三丈も高き櫓を船の  
上に組み上げ、それより石火矢を射かくること盛に、天地に轟く大音響して、

ばつと中れば、微塵に砕くる、御方の軍勢之に討たれて死ぬもの、算を亂す。敵に後を見せては云ひ甲斐なし、命を棄て、唯撃ち退けよと、九州の武士、蒙古軍のうしろに廻る。中にも松浦黨の決死の人々壹岐松浦の海上にて散々に敵と渡り合ふ。忠勇義烈の面々に支へられて、蒙古軍進むこと得ならず、招討使忽都、哈思など討死して、さうなくはかゝらず、退て肥前の鷹島を根據とした。

閏七月の一日、晝のほどより雲亂れ、風おどろくと吹き、浪の氣色も唯ならず見えたが、夜に入つて、次第に吹募り、逆巻く波は十丈二十丈、虚空に巻き上がると見る間に、どつと奈落に落つる。海水皆鳴りて八大龍王荒びに荒びる。黒雲一天をかきむしつて、天も闇く、地も闇く、海も闇く、鷹島に集れる蒙古の軍船を海岸に叩きつけ、大海原に沈めと砕く。すさまじく恐しく海水とどろける中に、船の砕くる音、人の叫ぶ聲が夜陰に聞えて天地は唯物凄うあつた。

打揚げられたる元、高麗軍の屍は無數であつた。敵の大將の溺死するものも多くあつた。范文虎は山なす怒濤の裡に投げられたが、板子一枚に身を委ねて一日一夜の漂流に身も魂も消えんとしたれど、幸にもまだ砕かれぬ軍船に取りつきて本國指して逃げ歸る。辛うじて命を鷹島に取りとめたるものは、木を伐り、舟を作つて歸らんとしけるを、少貳景資、島津久經、比志島時範等、勇み立たる御方の軍勢を引連れ、前後左右より包で撃つ。元、高麗の軍勢此に敢なくも討死するもの多く、捕へられて斬られたものも夥しくあつた。

元軍の死するもの十餘萬人、高麗の兵は七千に餘つた。生きて還るもの僅に三人と稱せられて居るが、三人よりは多くあつたらしい。

小國と侮つて、攻め寄せたる蒙古は手ひどく失敗した。元の帝忽必烈は猶懲りずに、第三回の遠征を計畫したが、終に實行することなくして終つた。之より後足利の室町幕府までは我國と支那との間に交通は絶えた。

入寂

『日蓮下痢去年十二月三十日事起り、今年六月三日四日、日々に度を増し、月々に倍増す。定業かと存する處に貴邊の良藥を服してより己來日々月々に減じて今百分の一となれり。知らず教主釋尊の入りかはり參らせて日蓮を助け給ふか。地湧の菩薩の妙法蓮華經の良藥を授け給へるかと思ひ候なり。』

建治三年の末から弘安元年の夏頃まで日蓮は腹を病で、心地惱ましくあつたが、池上兄弟の父中務左衛門尉が進めたる藥の功驗いちじるしく、病頓に癒えたれば、さてこそ此禮狀を左衛門尉の許に贈つたのであつた。

弘安四年、蒙古來の時には日蓮年六十、其歳の九月二日、波木井實長は日蓮を其館に請待し、一門擧つて其筵に列なる。實長は今日より家督を嫡子彌六郎

長義に譲り、我身は髻を切つて佛門に入り、名を法寂日圓と號づくる。日蓮は同じ月の八日の朝身延に歸つた。

此頃身延の山は法燈輝き、歸依信仰して詣で來るもの引きも切らず。小やかなる庵室にては事足らず、是非なく、此に木を伐り、草を芟つて、地を坦し、六丈四方の堂を建て、身延山久遠寺と名づける。是歲十一月二十四日、開堂の供養式は取り行はれた。然れども高祖日蓮の法體は漸くに健やかならず。十月二十二日に宮木入道に與へたる書面には

『今月十四日の御札同じき十七日到來。又去ぬる後の七月十五日の御消息同じき二十日比到來せり。其外度々の貴札を賜ふと雖も、老病たるの上又不食氣に候間、未だ返報を奉つらず候條、其恐少からず候。』

とある。十二月八日の上野殿母尼に贈りたる書にも、

『八年が間病と申し、齡と申し、としどしに身弱く、心老れ候つるほどに、

今年は春よりこの病起りて、秋過ぎ冬に到るまで、日々に衰へ、夜々にまさり候つるが、この十餘日は既に食もほととどまりて候上、大雪は重なり、寒は責め候、身の冷えること石の如し、胸の冷たき事氷の如し。』  
とある。上野殿母尼より進ませたる酒を飲めば、火を胸に燃くが如く、湯に入りて似たりと喜び、兩眼より一つの涙をこぼして、其芳志を謝した。日蓮病めりと聞て、法弟檀越の心痛は一方ならず、池上宗仲は清酒一筒、味噌一桶、生和布を贈る。誰も彼もと物を贈り、尋ね來て慰める。弘安五年となつて、峰の白雪次第に解け、富士川の水嵩はまさり、若葉の陰は冷しくなつたが、日蓮の健康は次第に勝れなんだ。日蓮心に思ふ、  
『釋迦牟尼佛は靈山にいまして八箇年法華經を説き給ひたり。日蓮は身延に入て九箇年の讀誦なるぞ。傳教大師は比叡山に三十餘年居給ひたれど、あの山は濁れる山なれば兎角の論に及ばず。我の此の山は天竺の靈山にも勝ぐれ、本

朝の比叡山にもまさる。されば吹く風も動く草木も流るゝ水の音も皆な此の山にては妙法を唱ふ。但し釋尊は靈山に居ますこと八年なりしが、其の御入滅は靈山より良に當れる東天竺俱尸那城跋提河の純陀が家にてあつたるぞ。御墓は靈山に建てさせ給へり。日蓮も是の如く身延山より良に當れる武藏の國池上右衛門太夫宗仲が家にて死なば死すべし。縦いづくにて死すとも、墓は身延山に立たうぞ。』

日蓮は今將に身延を發ちて入寂の地に赴かんと決めたのであつた。

二

佐渡以前の日蓮は奮闘の勇士であつた。權威と戦ひ、他宗と争ひ、刀杖をも瓦礫をも罵詈をも難言をも、迫害をも威壓をも物ともせず、難は加はつて精神愈よ熾に、敵は多くなつて勇氣は益す加はつた。

『刀杖の難に遭ひ、人毎に仇をなされ、所を放たれ國を出され、野中に捨てら

れ、風雪に苦む。これ偏に我身には咎あらず、唯日本國を助けんと思ひし故なり。

龍の口に身は死で、佐渡には魂魄が渡る。魂魄は鎌倉に歸つて、久しからぬうちに身延に移つた。佐渡四年の在島はさまざまの苦みに逢うたれど、日蓮と云ふ偉いなる人格は此時に大成した。奮闘の勇士は修養の聖人となつた。身延の九年は修養の聖人が更に其修養に磨きをかけて、教養を完成したものと見るべきであらう。

『一切衆生南無妙法蓮華經と唱ふるより外の遊樂なきなり。經に云く、衆生所遊樂云々、此文あに自受法樂にあらずや。衆生のうちに貴殿もれ給ふべきや。所とは一閻浮提なり。日本國は閻浮提の内なり。遊樂とは我等が色心依正ともに一念三千自受用身の佛にあらずや。法華經を持ち奉つるより外に遊樂はなし。現世安穩後生善處とは是れなり。たゞ世間の留難來るともとありあひ給ふべから

す。賢人聖人も此事はのがれず。たゞ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と唱へ給へ。苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へ居させ給へ。これあに自受法樂にあらずや。愈よ強盛の信力を致し給へ。』

建治二年六月二十七日、四條金吾頼基に遣したる自受遊樂の説は三昧に入たる如是觀であつた。動けば南無妙法蓮華經、止れば南無妙法蓮華經、行住坐臥、即ち題目と伴ふべきである。

暫らく池上にて、所勞の養生せばやとの仰せ頻りなれば、法弟檀越も、遠路の所如何あらんと打寄つて心を痛める。されど折角の御意に背くも心ならずと、其用意をする。波木井入道は次男彦次郎實繼を伴に添へる。日蓮の愛馬栗鹿毛に上人を打乗せて身延を出で立つ。法弟檀越、附き添て九月八日の午の刻過ぎ馴れし身延をあとにして、馬の足搔ゆるやかに、其夜は下山兵庫の邸に宿り、



十一日には黒駒に、十二日は河口の梅屋上房に宿る。顧みれば身延は次第に雲のうちに入つて、あなたくへ遠ざかる。十三日は吳地の遠山藤學がもとに入り十四日は駿州竹の下なる鈴木繁八の宿に泊り、十五日は相州關木の下田五郎右衛門の宅を宿とし、十六日は平塚の長谷川氏に一夜を明し、十七日は瀬谷の妙光寺に宿り、翌る十八日午の時、池上に着く。十九日波木井入道に一書を遣はす。

『道の程別事候はず、池上まで着きて候。道の間山と申し河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、公達に守護せられまゐらせ候て、難もなくこれまでつきて候事恐入り候ながら悦び存候。さてはやがて歸り参り候はんする道にて候へども所勞の身に候へば不定なる事も候はんすらん。さりながら、日本國にそこばくもあつかうて候身を九年まで御歸依候ぬる御志申すばかりなく候へば、いづくにて死に候とも墓をば身延澤にせさせ候べく候。又

栗鹿毛の御馬は餘り面白く覺え候程に、いつまでも失ふまじく候。常陸の湯へ曳せ候はんと思ひ候が、若し人にもぞ取られ候はん。又其外痛はしく候へば湯より歸り候はんほど上總の茂原殿の許に預け置き奉つるべく候に、知らぬ舍人をつけて候ては覽束なく覺へ候。まかり歸り候はんまで此舍人をつけ置き候はん存候。』

三

六十一年の一生は短いやうで短くあらぬ。天地のあらん極み、此世のあらん限り、朽す浪びす久遠不滅の法の華は此一生の間に花咲て光明は十方世界を治く照した。其短いやうで短からぬ一生は千里を流るゝ大江のやうで、落葉を潜り、巖に支へられ、瀧となり、瀬となり、淵となり、湍となつて、舟を泛べ、筏を流し、田を潤し、野を浸して、末遂に洋々たる大海の潮となつた。

あらゆる艱難と闘ひ、敵と闘ひ、權威と闘ひ、波濤風雪と闘ひ、飢寒苦惱と

戦ひ、瓦礫刀杖と戦ひたる日蓮は法華經行者として、稀有の偉績をなし、畢つて、今安らかに武州池上の池上宗仲の館に其病を養ひつゝある。日蓮心に思ふやう、此度の病は定業なり、癒ゆべからずと、泰然として其天壽の盡くるを待つのであつた。

經に云ふ、

『衆我が滅度を見、廣く舍利を供養し、咸皆戀慕を懷き而して渴仰の心を生ず。衆生既に信伏す。質直にして意柔軟なり。一心佛を見んと欲し、自ら身命を惜まず、時に我及衆僧共に靈鷲山を出づ。我時に衆生に語る、常に此に在りて滅びず、方便力を以ての故に滅不滅あるを現す。餘國に衆生の恭敬信樂するものあらば、我復彼中に於て爲に無上法を説かん。汝等此を聞かすして、但我を滅度せりと謂ふ。我諸衆生を見るに苦海に没在す。故に爲に身を現さず、其をして渴仰を生せしめ、其心の戀慕なるに因り、乃ち出で、爲に法を説く。神通』

力是の如し。阿僧祇劫に於て常に靈鷲山及餘の諸住處にあり。』

日蓮も亦死ぬとも死なぬものであつた。

九月二十三日には大曼陀羅を書いて池上宗仲に取らせる。宗仲は我邸内に建立したる本門寺の開堂供養を請ふた。日蓮快く諾なひて、此に大衆を聚めて誦經唱題をなし、大衆は之に和して、嚴かなる響は一山を動かした。それより立正安國論を講じて其式を終る。

十月三日、日朗を召して立像の釋迦牟尼佛、立正安國論、免狀二通を記念にとて分け與へ日昭、日朝、日興、日向、日頂、日持を六老僧と定め、入滅後には此六人に仰き事へよとの沙汰あり。又法弟檀越へ遺物の分配をそれ〱日興をして認めさせる。十一日には今年十四歳になれる經一磨を枕邊に呼びて、京都の妙法弘通を忘るゝなどの重き遺命があつた。經一磨泣く〱之を畏みて承る。

弘安五年十月十三日、今は入滅の期到れるよと法弟檀越を近けて、聲靜に説き示して云ふ、

『いかに方々、日蓮の最期は近き候よ。日蓮は日本第一の法華經の行者なり、日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給はゞ梵天帝釋四天王閻魔法王の御前にも日本第一の法華經の行者、日蓮房が弟子檀那なりと名乗て通り給へ。此法華經は三途の川にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ參る橋なり。靈山へましまさば良の廊にて尋ねさせ給へ、必ず待ち申すべし。但し各々の信心に依る事なり。信心だに弱ければ、大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮を恨み給ふな。』

高祖の遺訓は重く、尊くあつた。自筆の曼陀羅の下にてやがて、聲微に誦するは壽量品、

令入於佛道、爾來無量劫、爲度衆生故、方便現涅槃、而實不滅度、常住此說法……  
大衆一同之に和して涙とゞもに誦する御經の聲も靜に香煙緩くたなびき、法華雨と降る裡に、次第々々に高祖日蓮上人の不滅の靈は人間を離れて、遠く遠く靈山のあなたにさらばく。南無妙法蓮華經。

日蓮上人 終

大正十五年七月二十日印刷  
大正十五年八月十五日發行

日蓮上人

定價金二圓

著者 笹川 種郎

東京市本郷區元町一丁目三番地

發行者 鈴木 茂

東京市本郷區元町一丁目三番地

印刷者 田邊 當義



作者者印

發行所

東京市本郷區元町一丁目三番地

京文社

電話小石川五九八六番  
振替東京八二二六番

【所刷印口溝】

◇ 類 書 版 出 社 文 京 ◇

東京音楽学校講師 草川 宣雄著	理學士 田邊 尚雄著	東京音楽学校講師 牛山 充著	理學博士 早坂 一郎著	岡 鬼太郎著	岡 鬼太郎著	文學士 藤田 精一著	柘植 信秀著
音樂叢書第二編 唱歌法及發聲法	音樂叢書第一編 音樂概論	音樂叢書序編 音樂鑑賞論	地 人	鬼太郎脚本集 卷二第	鬼太郎脚本集 卷一第	南朝史話 忠 不 忠	新時代の親鸞教
送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價四四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價四四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價五五六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價五五六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價二四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓
音樂法發聲法の因襲を破る者	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ	西洋音樂の生理的條件に合ふ

◇ 類 書 版 出 社 文 京 ◇

文學博士 森 槐南著	文學博士 佐々木信綱著	文學博士 坪井九馬三著	文學博士 坪井九馬三著	文學博士 服部宇之吉著	文學博士 服部宇之吉著	文學博士 服部宇之吉著	文學博士 服部宇之吉著
作詩法講話	和歌史新考	國民國語のあけぼの	増訂 史學研究法	支那の國民性と思想	訂増 支那研究	孔子及孔子教	訂改 東洋倫理綱要
送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價五五六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價四四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價四四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓	送價三四六判上製 料百六十餘頁 十八錢圓
明詩學の義を説く	和歌史の研究	國民國語のあけぼの	史學研究法の増訂	支那の國民性と思想	支那研究の増訂	孔子及孔子教	東洋倫理綱要の訂改

◇ 京 文 社 出 版 書 類 ◇

文學博士 加藤玄智著	文學博士 深作安文著	時高庸紀編	東京高等學校講師 田中敬一著	理學士 田邊尚雄著	文學士 小林愛雄著	佐藤謙三著	文學士 小林愛雄著
東西思想の比較研究	現代と思索	細目式 教材解説 童謡名曲の教へ方	作曲の入門	音樂叢書第十一編 日本音樂の研究	音樂叢書第九編 歌劇の研究	音樂叢書第八編 バイオリン奏法の研究	音樂叢書第四編 詩と音樂と舞踊
送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢	送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢	送料 三三 二四 九七 十餘 圓百 十七 錢	送料 三三 二四 九七 十餘 圓百 十七 錢	送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢	送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢	送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢	送料 四六 三二 五五 十餘 圓百 十八 錢
類探の精神現代生活思想と稱すべきたる人	西洋及び支那の文明の進歩を論ずる	其倫理的立場を明らかにし、現代思想の進歩を論ずる	小學校の唱歌教材として、優秀なる作品を採り、其の標準を示す	樂曲の形式と伴奏法を、平易に解説し、作曲の基礎知識を、了解せしむ	廣く東洋音樂に基き、從來の日本音樂史を、新研究の網羅せる文獻を、整理し、その發展の経路を、明らかにす	日本に於ける歌劇の先驅者として、その研究の必しきを、論ずる	古今東西に渉る民謡童謡、其の歴史的事實と、美学的考察とを、詳述す



終

